『或る数学研究者の創作ノート』の精肝

Siveeyeah

序章

師が亡くなってから数か月後、オックスフォードの研究チームにいた私は大学に呼び戻され、教授の遺した膨大な一連の著述（我々はそれを天易天聖叢書（あまやすあまきよそうしょ）若しくは文庫と呼んでいた）の散逸を防ぎ、整理して編纂輯綴せよとの事だった。

「しかし研究が」

「これは何よりも重要な事項である。従ってＯＸには佐々邑木西欧州くんに行ってもらう。先方は既に了承済みだ」

「そんな」

しかし現実世界に否応も有無も是非もない。

私はどうにかそれを纏め上げたのだが、幾つかの断片的なメモから、師に秘めた創作への情熱があり、僅かながら小説らしき物の痕跡があることを発見し、密かにこれを纏めて学友に配った。発見した草稿は残念ながらいずれも完成した小説にはならなかったようであるが、師を知る者には非常に興味深いものであった。それは数年をかけて少しずつ人に知られ、いつしか知る人ぞ知る名著となったのである。

私はその中から心に思う一〇の断片を選び、上梓することとした。印刷に当たっては師の愛用した原稿用紙に似せた紙質を用い、師の愛用の青の万年筆で私が稚拙ながらも手書きし、一の文字の中にも光移ろう湖のように青のインクの濃淡があらわれるのを楽しみながら、これをその伜出入りの印刷製本業者に渡し、スキャニング方式により上梓した。紙やインクの風合いを、手にし、眺め、存在をもご笑味いただければ幸甚の至り極みである。

第1章　最強大烈奥義超裂極真

いみじくもレフ・トルストイ伯爵の著『戦争と平和』のエピローグ第二篇に叙べられているとおり（エピローグに第二篇があること自体が既に異様だ）、人が右手を挙げようとして右手を挙げることも他から独立した自分の意思ではなく、自分以外の諸々の原因によるものであり、すなわち必然律の支配であると云う事実を認知するにはコペルニクス的な脱自的見解が必要となる。

昔の人には、否、たとえ現代人であろうとも自然な感覚による限りは、太陽や月や星が東から西へ天空を廻るように動いて見える。

ところが周知のとおり、事実は全く逆で、どう眼を凝らしたって日月が動いているかのようにしか見えなくとも、廻っているのは私らの方であり、地球である。

同様にどう考えても自分の好き勝手で動かしている手足さえ自分の意思ではないのである。これを理解するには、自然状態の自分を超越した脱目的な見地を獲得するために積み上げた論により、理叡を以て解するしかない。

もしこう言われ君が躍起になって左手を挙げ、振って見せたとしよう。「どうだ、これでも俺の意思じゃないと言うか」そうだ。では問おう。君はなぜ今躍起になったのか。その意地はどこからわいて来たのか。こう云う場合に意地を張ってみたくなるのは、君が設定したのか。

また問おう。君が君の意思によって手を挙げて私に見せたことが、どうして君の意思によって手が挙げられたと云うことの証明になるか。そう云う条理の運びをどのような経緯を以て君は措定したのか。

今一つ問うてよいか。君は左手を挙げて自分の意思だと言うが、『左手を挙げる』と云うその概念はどこぞから得たのか。一切前提のない、プレーンな状態から、その一つのかたちを削り出すにあたり、あらゆる可能性のあった状況下で、敢えてそのかたちをそう云うふうに定めた根拠を君は申し叙べられるか。

いや、あらゆる可能性があったか、どうか、いかようにして確かめられようか。根源から問い質そうとするならば、私らは全ての前提を疑わなければならなくなり、途方に暮れる。『疑う』とはどう云うことか。『わかる』とはどう云ったことか。なぜそうか。それらをしたならば、なにをしていることになるか。

もしそのような批判を自らに下すとすれば、私らは自分がなにを『わかろう』としているのか『わからなく』なるであろう。疑問自体が私らに先天的に与えられた論理と云う軌道に乗ってその順路をたどることの一つでしかなく感じられ、全くの混乱に陥る。

だが、さような混乱に陥ることも、飽くまで軌道上の順路であり、軌道を外れることが可能ならば、その矛盾すらも存在しない。だが、軌道を外れればすなわち惟（これ）を外れると云うも正論もまた、理叡を以てする判断でしかなく、つまりは軌道の順路である。

全ては意味不明の仮設、架空だ。

そしてその軌道を外れることは不可能なのである。網膜を使わずにものを見ろと言うのと同じである。理叡は我々の意識、観ることそれ自体だ。

この根源からの問いに応えられる人はない。そこにおいて俎上に上がっているのが諸概念自体だからである。これを諸概念の理叡を以て説明しようとすることは、或る占いがあたるかどうかをその占いで決めるようなものである。私らを支配する理叡に準ず限り結論が不可能となる。手を挙げることが自分の意思であるかどうかを問う以前に既に私らは充分に操り人形である。

そうであるとするならば、私が今自ら意思し、諸手を挙げたとしても、五千万年前に既に歴史的必然性によ

って定められていたことではない、とは言い切れない。

また『諸概念の理叡』を超えてなにかをなせようか。常にそれの範疇でしかないし、僕らに他になにができようか。

さて、これは小説である。小説らしくないと言うなら、King Crimson の『Lark's Tongues In Aspic, Part Two』は音楽ではない。どちらも、焼き過ぎなくらいよく焼いてある、と云うだけのことである。

かと言って冬の寒さをコートなしでは街歩きできない。いくら諸概念が理叡上、非理叡的であって、私らが先天的に与えられた期待感によって期待しているような本質性がないと判定されようとも、『頬を切る氷の礫のような霙』と云う諸概念（いかなる概念も単体でなく、複合的、かつ複雑系的である）をいかもできない。

現実は非情で殆どどうにもならない。

寒いし、痛みだ。

早く暖かい家に入りたい。

それでなにを言わんとするかと言えば、『空性』、と云うことだ。一切路傍の石のよう、『空』であると云うことだ。『空』で結論に達せず、ただの現状。すなわち在るものは非情、即物的に乾燥した、現実のみである。だからコートは素材にこだわる。時折、袖のストラップを眺めては、綿繊維の織目を眼で追いながら、その無表情さを悦した。自然と視線はペッカリーの手袋に移り、複雑な皺の入った南米産野生豚皮革素材の感じを愛でる。沙漠の風蝕岩のように味わい深いこと堪らない。

さて私は『恩顧士結城春深堂』のガラス戸を引いた。龍呑村にある骨董屋である。

坐って店番するのは天児郎さんの孫、暇人、真兮くんである。二十五歳にして祖父の手伝いが職業である。私らともに尻の下に敷けるほどの長髪で髭を蓄えているが、髪髯に関して言えば私は彼の比ではない。

彼の口髭は喉仏の下まで垂れている

彼の頬髯は鎖骨の上まで垂れている

彼の顎鬚は臍の位置まで垂れている

『Lark's Tongues In Aspic, Part Two』のリフのように、彼を見るたび、私の胸に刻まれるのである。

それだけでも彼に会いに来る価値がある。

愛用のインパラを車庫に置いて真冬に、敢えてコートに皮手袋で来る意味があるのである。そして私の思想の多くは彼の反映、真似に過ぎない。

真兮くんは手離さない羊の大角のようなキャラバッシュ・パイプ片手に、いつも玩味している碗をいじっていた。

顔を上げずに言う。

「来たね、哥舞妓くん」

そう、私の名前は、哥舞妓、である。傾き者になって欲しかったらしい。

いろいろな考えがあるものだ、なんてことはどうでもよい。

それほど熱心に茶陶を返したり、手に玩んだりしながら、どうして私とわかるか。それはここを訪ねる客などなく、亡くなった彼の道楽者の曽祖父が病膏肓に入るの境域で構えた店舗だからである。

その碗は岐阜県東濃地域で焼かれたいわゆる『美濃陶』で、淡黄白色の素地に長石単味の乳濁釉を施し、志野と呼ばれるもの。

轆轤で筒型に成形されながらも、篦と指頭とでざっと撫で切られ、粗くも意図的な切れが把捉不能な自然さ悠然、捉えられぬゆえに自己の領域外へと略取されたかのような云う感で胸を梳く。

もぐさ土に厚くかけられた長石釉が白く焼きむらのある、深みのある半透明となる。白さは光沢深くも存在の明晰を湛えた幽玄、長谷川等伯『松林図屏風』のよう幽玄ではなく、或る晰らかさからくる平坦な幽玄である。透明に近くなって素地の透ける部分から土の鉄分が熱で変じて赤くほんのり泛び、特に口縁、及び腰のところにおいて著しい。これを緋色、また文字どおり火色とも云う。

かような景色の上に、さらに小孔と呼ばれる気泡の抜けた跡が柚子膚のように無数に見られ、なお貫入と謂われる罅割れがそちらこちら随所にあり、いわゆる『見どころ』を做す。

釉裏には鉄顔料による絵附けがなされ、むらのある半透明の底から幽然と泛んでいる。これは鉄絵と呼ばれる。

真兮くんはこの山のごとく海のごとく複雑多岐な捉えがたい、存在の泰然たるふうを見れば、千鳥唐破風の拝殿の奥にただ脇鳥居を左右に附した三輪鳥居があり、本殿なく、磐座(いわくら)ある三輪山が聳えるばかりの奈良、大神神社の有様がまざまざと泛ぶと言うのである。また鳥居の尖は那智の御瀧があるばかりの飛瀧(ひりゅう)神社、三輪山の山裾に鳥居が設けられているのみにて天照皇大神をお祭りする檜原(ひばら)神社なども想起すると言う。

いったいに意味不明だが、彼は西欧のお伽噺にでて来る魔女のような、フェルト製の鍔広の尖がり帽子（円錐形の尖がり部分が折れ倒れている）を始終、愛好しているような男なのである。私らにわかるはずがない。

パイプを口から離し、煙を吐いた。濃い紫煙が散じる。

「小生がつらつら考えながらこれを眺めているとね、脳裏にね、泛ぶんだよ」

「なにが」

「メソポタミアさ。羊がわずかな草を食むような乾燥した岩だらけの平原、緩やかな丘陵、それだけしかない。現実だけしかない世界だ。丈が低い、髯の繁く生えた麦の原種が少しばかり育っている。そこに強烈で濃厚、異様な茜色の黄昏が烈しく照り附け、岩の襞も麦の髯も強く濃く燦めかせ、オレンジに染めながらも生々しいまでに晰らかにし、泛び上がらせている」

「それが不可解なんだよな。本邦の茶碗から、なぜそれが泛ぶんだい」

「ああ、君はわかっていないのだ。存在は複雑系的に意味を孕み、常に多義的で捉えがたく映えなければならないものなんだ。静止しているものを視覚が常に刺激として感じられるよう、微顫動を絶やさぬようにね。

理由なんかだれも知らない。小生らには与えられた限界の中でしか実存がない。

そう思わんかね。存在は微動すらせず、捉えがたく無表情、あたかも移ろいのように映える。殆ど曖昧な微笑のようにどうにでも受け取れるが、飽くまでその沈黙を破ることはない。しかし、無言を以て、すなわち自らを用いて自己を顕示している。

非情なまでに現実性でしかなく、一切空燥ゆえに、意義は無際限な揺らぎ孕みとして映る。空性（シューニャター）と現実性とは同義だ。

だから無際限なのである。空性は無際限なる多義、森羅万象たることと同義なのだ。陰極まって陽となり、陽極まって陰となるがごとし。

喫茶去（きっさこ）（まあ、茶でも飲んでから行きなさい）」

幻想が亦た復た脳裏を廻舞する。蜂蜜のような濃密な空気の中、強烈な茜の夕、バビロンの青きイシュタル門、バビロンの獅子は天空の支配者、牛、ドラゴンは頭が蛇、足は鷲、尻尾は蠍、アッシリアの獅子狩り、精密な筋肉、鬣の浮彫、龍文は時代に独自で異なる、龍は存在するのか、髯は麦の原種の髯の燦めき、アウグストゥスブルク宮殿の息も止まるような華麗なロココ装飾を想起させる、ああ……………

第2章　戯れに…

朝の十時半頃、真兮（まことや）は緩やかに蒲団から上半身を起こすと、パイプを点じた。キャラバッシュ・パイプと云って南アフリカ産の瓢箪の一種を加工した大型のものだ。シャーロック・ホームズが使用したシルエットで知られているが、コナン・ドイルの作中には出てこない。しばしそのまま動かず、皮膚を刺激する寒さにただ呆然としていた。屋内にもかかわらず、息は白い。一月二十八日、今日は旧暦の大晦日にあたっていた。

いつもの風体に戻るべく、着替えを始める。

メフィストフェレスのような尖った鼻から下の口髭をブラシで梳き、頬を覆う頬髯を梳き、顎に繋って臍のあたりまで垂れている顎鬚を梳く。サイケデリックなペイズリー柄のTシャツを肋骨の泛いた上半身に着て、

色褪せたサテン地のシャツに袖を通す。

次に擦り切れたきつい細身のリーヴァイスを腰で穿いた。ポケットには古本屋で買った文庫、ハイデガー、レフ・トルストイ、ユイスマン、ニーチェ、高橋源一郎、ステファンヌ・マラルメなどを無理やり詰め込む。くたびれた膝丈のアーミー・コートを羽織った。

アーミー・コートとは言っても、紫に近い濃いめのパステル・ブルーで房飾りや飾り紐、肩章がついている、これもサテン地のものだ。『Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band』のLP（モノクル）アルバムのジャケット写真でザ・ビートルズが着ていたものと同じデザインで、特注品だ。ポケットに片眼鏡を仕込む。

帽子を被る。鴉のように黒くてつばが傘（ブリム）のように広い。山の部分は東京タワー（クラウン）のように尖っている。だがタワーは途中で折れていた。今日は特にその帽子の下に毛糸編みの帽子を入れる。

マフラーをぐるぐる巻きにし、コートの上にさらにダウンを被せる。家を背負って移動するかのような感じだ。

玄関でブーツを履く。ずり落ちたハイソックスのようによれよれになってたるんだ蛇皮のロングで、冬用に用意した大きめのもの、中には新しい藁を詰め替えてある。

アルミ製の折りたたみチェアを背負って颯爽と家を出た。デジタル・ミュージック・プレイヤーでキング・クリムゾンの『Larks' Tongues in Aspic, Pt. II』とレッド・ツェッペリンの『Whole Lotta Love』とをイヤホンから猛烈に音洩れさせながら繰り返し聴いている。

雲は厚く、雪になりそうな天候であった。龍吞村の一帯は田畑か雑木の繁る山ばかり、人家は疎らだが、彼の住むメイン・ストリートだけは龍吞神社への参詣道へと繋がる由緒ある道で、古い甍がせめぎ合い、全体の風景に比して唐突な密集型を做している。

とは言え、参道を逸れるとすぐに畦道だ。やがて綾香州と云う名の丘の麓、麁神社の鳥居の前に着く。その先は朽ち欠けた石段で丘へと登るが、敢えて進まない。鳥居の脇にある、道と雑木との境の小さなスペースに椅子を置き、坐ってパイプに火を点けた。十一時半である。

しばし蕭然、黙然としているも、降雪が迫る前触れの底冷えを感じるばかりか、細かな雨が降り始めると、意気地もなく家に戻り、傘を持ち出して来た。そして再び同じ場所に坐る。強い降りとなる。無為に雨を眺めていた。震え、すり寄せる足先があたる。石塊（いしくれ）だ。半ば無意識に、初めて石器として石を手にした原人のごとくにそれを拾う。

硬く、厳つく、表情がない。人への同情など示すべくもなく、掌にすれば粗い。いわれない唐突の無骨さがある。あたれば毀ち、振り下ろせば砕き、擦れば痕する。此れあれば此れ、彼れあれば彼れ、全くの無味乾燥だ。

長い時間、石を手に愛でる。

隆臥（たかふし）が来た。いつもどおり弛んだ大きめの毛糸編みの帽子に駱駝色のダウン・ジャケット、穴の開いたジーンズに破れたバスケット・シューズ、違いと言えば今日は大きなビーチ・パラソルを傘代わりに差していることだけだ。無精鬚を撫でながら言う。

「もう来ていたんですか。

絶対誰もいないとおもっていました。まだ午後の三時ですよ。初詣まで九時間もあります。何時から来ていたんですか」

真兮は石を無造作に擲って応える。

「さあ、何時だったかなあ。確かにこんなに早く来る必要性はなかったよ。だがね。

所詮、人生は無為徒労だ。小生らはわかったつもりで何もわかってはいない。ただ直観するばかりさ。よく閲すれば何の謂れもない。根拠を質しても見出せるのは自らの胸中にある納得と云う心的現象ばかりだ。全ては原的に、かつ直截的にそれとして観取されているに過ぎない。これは雨、あれは樹木、君は隆臥、小生は人間、人助けは義しく、諸行無常、とね」

「それはそうでしょうけれども、それじゃあ、しようもないじゃないですか。嘘でもいいから何かなくっちゃあいけません。

そんなことこそ厳密に質す必要性があるんですか。どうせ、何もわかりゃあしないんですから」

「ほう。

こりゃあ、一本やられたね。君の言うとおりさ」

「じゃあ、このパラソルでも差して雨の寒さを防ぎましょう。これは実存的な問題です」

「ここに深く刺そう。こりゃあ、いいものを持って来てくれた」

「何だあ、結構、悦んでくれているじゃないですか。

しかし、やあ、これでもまだ濡れますねえ。真兮くんはさらに傘があるからまだいいけれども、私は」

「これが野趣ってもんさ。風流だね」

「真兮くんはそうでしょうね。私には生存の問題です」

「いやいや。時に隆臥、今は生きるために何をしている。つまり仕事だが」

「真兮くんは相変わらず家の手伝いですか」

「農家の方はさっぱりだがね。

骨董屋の方は毎日、手伝っているよ」

「お店に坐って好きなものを磨いているだけでしょう。だいたい、村に骨董の需要なんかあるんですか」

「ないね。だから坐っているだけなのさ。他に何もできん。買いつけするほど目利きでもないしね。じいさんがいつも大枚叩いて仕入れては一喜一憂しているよ。そんなもんさ。

で、お主はいかがか」

「やっていますよ。今は山の管理ですね。杉木の間引きとか。結構、大変なんです、伐った木を運ぶのって」

「そりゃあ、そうだろうが、要は小生と同じだ。家事手伝いと云うわけだ」

「まあ、確かに。お互い呑気な身分ですね」

「ああ。のほほんとしとるよ。でなきゃあ、こんなところにいるものかね」

「私が二十三、真兮くんは二十五歳かあ」

「然り。真に善きかな」

「今日は早蕨も東京からわざわざ帰って来るらしいですね」

「ああ。久しくなかった全員集合だ。彼も何かあったらしい」

「少し聞いていますよ」

「失恋かね」

「そんなところらしいです」

「仕方あるまい。それが種の存続の大命題だからね。人が家の繁栄を願うのもその起源は同じだ。全ての人間的営為はそこに行き着く。名誉、実業、正義、芸術、全てね」

「身も蓋もないことを。本当ですか」

「当然さね。人はなぜ自己実現したがる」

「さあ。

もう考えるのが面倒臭いです」

「君のような仙人はそうだろうさ。だが大概の人間はそうじゃない。人は誰も自分の価値観に従って自己実現しようとする。自己のエネルギーの放出であるとともに、自らが肯定するに足り、なおかつ他者に肯定されるに足る自己を実現するのだ。

生きるに満足を求め、生きるに足る自己を実現する。それは畢竟、生存の本能だ。自己の生存を願うとは子孫の存続に繋がる。当然だろう。自分がいなければ子孫へは繋がらないのだから。自己保存の本能の起源は種としての存続を本意としているのだ」

「一気に結論まで言っちゃいましたね。本日の新春談義は終わりですか」

「何を言うのかね。まだ序の口さ」

四時になるとあたりは随分暗くなってきた。日も短いが、天候のせいもある。哥舞妓がダッジ・バンに乗って来た。アメリカン・フルサイズの、少なくとも日本人の感覚から言えば小型バスのような大型車だ。

「やあやあ、相変わらず早いね、俗世を離れた暇人たち。

どうせ真兮なんか、朝からいたんだろう。このクソ寒いのに」

隆臥が笑って応える。
「お見込みのとおりですよ、哥舞妓先輩」
「莫迦者、誰が朝からいるか。昼の少し前だ」
「同じことだね。さあ、少し凌ぎやすくしよう」
「おい、おい、神聖な初詣をしようとしているんだぞ。キャンプじゃないんだ」
哥舞妓は構わずに車から様々なアイテムを出す。タープを木の太枝に縛って地上にペグで留めて風上に広げる。ちょうど真兮と隆臥の並んで坐っていた場所の背後を覆うような感じだ。その傍らにテーブルとベンチとを置き、ビーチ・パラソルは家の中に家があるような様子になった。その中にさらに真兮の傘がある。
「小生はこれで相当ましになったな。哥舞妓くん、君はタープだけじゃ幾ら何でも足りないだろう。そのテーブルも大いに濡れてきたぞ」
「まあまあ。そのうち誰かが何か持って来るよ。さあ、少し奥に行って。台を置くから」
金属製の台を置く。その上にアウト・ドア用のガスコンロを設置する。
「コーヒーですか。ありがたいな」
隆臥が言うと歌舞伎が嘲笑う。
「不粋な奴だ。これを見ろ」
哥舞妓は車から鉄製の茶釜を出して来る。茶壷や棗、茶碗まであった。
「これは凄いね。野点かね、哥舞妓くん」
「そんなようなものさ。さあ、お湯を沸かすぞ」
「と言うか、壁と屋根とがない家のようですけれども」
「確かに。坐ってここから眺める氷雨の風景は奇妙でもあり、風流でもあるな」
「じっくりやろうや。沸くまではまだまだ時間がかかるから。やあ、本当に霙っぽくなってきたなあ」
叭羅蜜斗が来ると様相はさらに変わった。すっかり日は暮れて暗くなっていた。
「ブルーシートを敷こうよ、持って来たんだ。うまく敷けば靴も脱げる」
「待ちたまえ、叭羅蜜斗。小生は隆臥と創成期に作ったパラソルを残して置きたいんだ。この状態をね」
「じゃあ、四枚あるから下に二枚敷いてその継ぎ目がパラソルを刺したところにくるようにすればいいさ。おまえも物好きだよ、真兮。いや、下に敷く奴は二つ折りにするんだ。
で、あと一枚を枝から枝に渡して屋根にすりゃあ、上下の大きさが合うだろう。そして残りをタープと反対側の壁にする。
どうだい、これで」

「本当に簡易な家みたいですね」
「そら。石油ストーブも持って来てあるんだ」
「もう創成期の面影はわずかに忍ぶばかりだな。時代の流れだ」
「じゃあ、そのお茶を俺も一杯もらったら、今度は鍋の用意をしよう。そら、大振りの土鍋に牡蠣を山ほど持って来たんだ。椅子も足りないだろうとおもって、ほら」
「おお。牡蠣かね。善きかな、善きかな」
「食糧はともかくたんまり持ってきたよ。それに酒ね。家は寺なのに、結構これが来るんだ。さあ、ちょっとどいてくれ。ランタンを点すから。おい、哥舞妓、おまえの車と俺の車とをうまく並べればそっち側にも重厚な壁が作れるぜ」
「なるほどね。こりゃあ、こっち側だけ要塞みたいになるな。でも車の壁じゃあ、足下がスースーするぜ」
「いや、ちょっと待て。俺の車にダンボールが少しあるから、平たく潰して車の下の部分に重ねて立てれば完璧だぜ」
「こりゃあ、もう本当の家だね。間口が開いているのは一方だけだ」
「そうら、ランタンを中に点すぜ。これで灯かりがついた」
「まさしく文明だ」
「鍋の用意もいいぜ」
「隙間風は相当ありますが、しかし何か、暖かくなってきましたね」
「ふむ。凍えていたのが嘘のようだ。小生は一枚脱ぐぞ」
六時になると普蕭が来た。彼はさらに夏の休憩用テントとタープとテーブルとを持って来ていた。タープは二枚あった。
「これで完全に囲めるな」
「そのテントは入口部分に置いてエントランスにしよう」
「それがいい。テーブルを繋げると結構長いから、エントランスがあると少しはみ出せる」
「これで後から来る奴はエントランスで雨に濡れず靴が脱げるな」
「後代ほど便利になるものさ。風趣はないがな」
「まあ、普蕭、この鍋を食え。そして飲め」
「やあ、眼鏡が曇った」
七時には〆裂が来た。石油ストーブと灯油の備蓄とが増えた。
「こりゃあ、家だよ。暖かいと言うか、暑いわ」
「やあ、すごいものを作ったものだね。玄関まである。ここまでできているとはおもっていなかったよ。防寒

衣なんか着て来るんじゃなかった」

寒い道を最終電車に乗って帰って来た早蕨がとぼとぼ暗い雪道を歩いていると、狐か狸に化かされたように突如、雑木林にランタンの燦めく城砦が現れた。

「こりゃあ、すごいや、お邪魔します」

「おお、来たか。そこで靴を脱げ。コートをかけろ」

いつしか筆写である私 Siveeyeah は勝手な回想に耽る……

『あゝ、イタル、君が死んでから廿年が経つ。僕らは三十七歳になった。君は嗤うだろうか。いったいおまえらはなにをしているのかと。なにをしただろうか。わからない。生存していただけだ。一切を構わず、ガソリンを被って炎と化し、あの大磐の上から飛翔して軽々と死線を飛び越えた君に比べれば。間違いなく、生前の君の行動に一点の矛盾もすることなく、君の命は炸裂し、今も生きている。

先年、僕は眼底出血した。六十や七十歳代なら珍しくないそうだ。動脈が硬化したらしい。少なくも医者はそう言った。健康には自信をなくしたよ。加えて先日、同じ歳の従兄弟が動脈瘤の破裂で亡くなった。鑑みれば祖父も戦前戦中戦後を一貫して強健な共産主義者だったが、四十八のときに食道癌で死んでいる。

僕はいつも死を思う。そして不安になる。だれもが経験したことではあるが、だれもが未体験のことだからだ。僕は今まで一度もこの意識がなくなってしまって二度と戻らない体験をしたことがない。そんなことが考えられない。だから怖い。君は生きているときから凄絶だった。僕は未だに君を理解できない。

歳を取ると、などと言うと多くの年長者は笑うが、実質年齢は時間的年齢とまったく関係がない。偶々健康な人間はその楽天的な境遇ゆえに（たとえどんなにか辛酸を舐めていようとも絶対的に楽天的境遇だ）愚かなのだ。楽天ゆえに長寿なのだ。すべては運命である。彼らに薄命な人間を笑う権利は一切ない。寿命は実力で得た権利ではない。敢えて僕は不当な権益だと強く言おう。強さや才能や健康は運命であって実力ではない。そして僕ははっきりと告げる。生きることは生存することではない。

君はレフ・トルストイの『生命について』を読んでいただろうか。いみじくも彼の巨匠が叙べたとおり生命とは生存ではない」

附記：唐突なる冒険について……

……　吹雪だ。眼を開け続けることも難しい。氷雪は無情で、熊笹を分けるも、足下どころか腰から下の安全を確認することもなせない。しかも夜だ。叭羅蜜斗くんが持つカンテラを頼りに、尖頭の〆裂くんが木刀で草を薙ぎつつ進む。列の順番は「〆裂。叭羅蜜斗。普蕭。哥舞妓。真兮。早蕨。隆臥。大楽。春慶」だった。

頭頂に緑を抱くも白い岩膚を見せつける険しい丘陵地帯、大河ロヲホランが悠々と流れる。

聖イシュヴァン修道院は丘の頂の一つにあった。花崗岩を重ねた灰褐色の組石造建築は窓が少なく、石葺屋根を持つ典型的なロマヌ式の建造物である。普請（ふせう）は旅笠をもたげてそれを望んだ。斜面に苦渋する馬に鞭をやりながら御者は言う。

「今年は雪が多くてね。今はそら、春めかしておりますが、いやほんの先週までは難儀したもんでさ」

聖トメトスの庵があったと伝えられる場所に斉暦９３８年の建設以来、崇拝を受け続けているロマーヌ地方の教学の中枢でもある。

『い』と云うが最高の聖音であることは衆人に普く知られた識見である。高窓の光燦が頭上から差し込む薄暗い組石造建築の聖堂で祭壇に向かう僧侶が敬虔な面持ちで唱えるその響きはあらゆる理性（ラチオ）の論証を拒絶し、聖山の大磐のように聴く者を清爽なる天叡で涵たす。天を目指す真っ直ぐな支柱の尖にある天井の穹窿に響くその聖なる音の存在は言葉でもなければ空気の振るえでもなく、音質や音程や音の揺らぎにあるのでもない。日常言語に翻訳することが赦されない真咒のように、それはその存在自体で存在のすべてが完結し、それ以上の意義もなく、人は動かしがたい聖性が実在することを感じ取り、感官を走り伝わり全身に与えられる恩寵のあまりの崇高さに諸概念の虚しさを考えざるを得ない。

一切の理由や説明が附されることを卑しい穢れでもあるかのように厭う『い』と云う聖音が有すこのような特権的地位を考慮すれば、イサと云う名で呼ばれた聖者の名が『仏陀（覚った者の義）』や『キリスト（救世主の義）』と云う呼び名と同様に個人の姓や名ではないと主張する知識があることもしかるべきものである。しかしそれはノセリアやウリア、ルシアナ地方の一帯に一切の文献のなかった時代のことであり、ましてや寒村シルヴィエは言うまでもないことで、永遠に閉ざされて答を得ることはできない。今その名を挙げた北大陸（ノルテ）北東部はいずれも当時にあっては未開野蛮の地域であった。

たとえ記録があろうとも、歴史の真実それはただ目の当たりにした者が知るのみであり、失われてもはや確かめようがない。

斉暦（せいれき）前十七年と言えば、史上最古の王朝を建てたコプトエイジャ（南大陸（スール）南西部沿岸地方及び沙漠地帯にある神政国家）が既に第三十九王朝第二代、強権を確立し、虎吼王と呼ばれたラメナテンの衰勢期にあり、ノルテにおいても南沿岸部一帯から北緯四十度あたりまでは、鉄器の使用による大征服時代から一千年余を経て幾多の帝国が興亡し、聖典や法典などの高度な文物がタブレットや石碑に刻まれた時代であったが、彼の地では

族長（キング）同士が支配権を廻って抗争する蒙昧の世であり、わずかに岩などに聖象徴を記す以外に一切の文字らしきもののない状態であった。

『聖イヰ伝』（または『聖伝』）は聖者の受難十数年後に信徒らが結集して互いに記憶する教えを口承にまとめ（それは今日でも『聖大連祷咒パラジュニャ』として継承されている）たものを、さらにその百年後に聖セヴィリオスの手によって神聖文字パリオスを以て綴られたものである。聖アクリオスの『教会史―殉教の事蹟及び寛容令―』や聖オクバリウスによる『異教徒に対する反駁としての歴史』などもイヰの伝記に関する箇所はすべてその記述に依拠しているとするが今日の通説であり、概ねはそのように認められている。

『聖伝』によれば、聖者は十二月八日の吹雪の深夜、辺境シルヴィエ村から十数キロ離れたヤズロージャ山の麓、狼の遠吠えも風雪にかき消される気象下、森深い樅の老大樹の洞で生まれた。母親はヴァルゴ教の巫女ウヴリアであった。ウヴリアとは光の胎蔵を意味し、恐らくはいつの時代か聖教徒らによって創案されたものである可能性が高い。他に巫女の名が記憶された例がないところからも妥当な推論である。そもそもイヰの名すら確かでないのである。

さて、極寒の地でそのような時刻、普段ならば厚き杉材の壁に囲われ、茅を葺かれた聖社から出ることもかなわぬ彼女がなぜにそのような場所にいたのか。

今もそうであるようにその頃にあっても巫女と呼ばれる者ならば必ずや無垢の処女でなければならず、彼女は禁忌を犯した者として追放されていた。伝承するところが史実であるとすれば、本来なら死罪に処せられるべきところをかくも異例な判決に終わったことに特別な事情があったと見る諸説は妥当なものであろう。

特殊なる事情とは何か。

『聖伝』の伝えるところによれば、聖者の父は有力族長であったバヴアクロノであると謂う。獣欲を満たすために彼が禁を犯して美貌を謳われた十四歳の巫女を社の支柱の陰間で凌辱したと伝えているのである。バヴアクロノは当時四十二歳で、ルシアナ地方に勢力を争う十四族のうち、最も武力に優れた一族の王、権力の絶頂にある暴君であった。主祭教主も他の巫女らも見て見ぬようにしかできなかった。それほど当時バヴアクロノの暴虐ぶりは人々から懼れられていたのである。

内紛する族内を屍の山を以て制し、天井高き樫の木の砦トゥールリオンの玉座で戴冠の儀に際し、咆哮のごとく自ら宣した。

「我が一族は神聖である。我が族の祖は神の系譜に連なる。

我が王権は神授ゆえに神聖不可侵である。余は神聖不可侵なり。

時に神意が起こって罪もなき民衆らが氾濫するロラン河に一切を奪われ、霆に撃たれ、山火事に炙られ、風雪に埋もれるとも、だれが無謬なる神を責めるであろうか」

聖社においてもさように嘯きながら聖なる巫女を汚したのであった。しかしことを終えて数ヶ月後ウヴリア

の懐妊を知ると先の言葉にそぐわぬ行動に及んだ。事実の隠滅を計ったのである。

砦の奥深く、小さな祭壇があるのみで窓のない、熊皮の敷かれた王の私的な祈祷の間に寵臣グーノを呼んだ。

「不義を犯した巫女がおるそうだな」

そう言って寵臣をにらみつけた。グーノは狡猾にしかし恭しく伺った。

「さような噂を聞いたように思います。王におかれましては、さようなる背教の徒をば裁くが聖務であるかと存じまする」

「さもありなん」

「しかしながら、ウヴリアはまだわずか十四にしあれば」

そう言ってグーノはさらに狡猾に眼を細めた。

「王におかれましては、ご慈悲を示されんことを」

王は試すように寵臣に問うた。

「王は慈悲を示すべきではある。しかし不貞を為した巫女を死罪に処するは崇敬すべき古来の掟である。いかにも慈悲とは言え、神より下された掟を神なる余が違えてよいものではない。余はそれを苦慮する」

グーノは大いに頷く。

「誠に。しかなれども、王よ、もしあまりに幼きウヴリアを死罪に処さば、思い上がった厚篤の士が無謬なる王にありもせぬ批判を加え、民衆を煽動するやも知れません。それでなくとも王への密かな逆意を抱く愚か者らや驕慢な他族の王どもがこれに乗じて王を難ずるプロパガンダと致しましょう。

社稷の永劫こそが王たる者の最大の聖務にしあれば、聖なる王にあられては人に下された義に捉われること莫れ」

これこそバヴアクロノの胸中に望んでいた答であった。凌辱した少女に死罪を負わせれば、まさしくグーノの言うとおりとなろう。それは避けねばならぬ。

「尤もである。余もそのように思う」

「されば、王よ。死罪を避けたまえ。追放とするのです。領外へ出れば、生死はだれにもわかりません」

「余はそれを義とする。それゆえそれを命ずる」

「御意のままに若かれ」

雪風に舞う正午、熊皮の鎧に象った鉄甲を補強し、馬革の脛当の騎馬兵士らが長槍を携え、檻を載せた一台の粗末な馬車を牽いて哀れなウヴリアを連れに来た。その日、聖ゲオルグスク社の祭主オルヴァンスは烈しい自責の念に駈られながらも、目立たぬように与えうる限りの飲食物と着衣とを手渡すことしかできなかった。心中恐れていたとおり追放の場所まで連行するだけのはずの兵士の一人は幅広の長剣、俗に言う斬首剣を帯びている。とすればこの男は首斬りの吏に相違ないのである。

「ウヴリア、汝幸いあらんことを、汝の生が人の世に正しく遺されんことを。汝の魂、正義とともにいつしか甦らんことを、汝に大いなる祝福あれ」

祭主は兵士らに聞かれぬよう巫女の耳に囁いた。

「祭主さま」

ウヴリアは涙して呟くのみである。

馬車は出でた。

ヤズロージャ山の周辺はオズロージャ山脈の始まりであり、村からわずか十数キロの距離にあるにもかかわらず、そもそもシルヴィエが辺境であるところから、人跡稀な未開の地であった。到底少女一人が雪の降り始める十月に放たれて生きて行ける場所ではなかった。

降ろされると彼女はしばし茫然とするも兵士たちが去って後、外套の裾を引っ張り上げながら凍て附く寒さのために少しでも風雪を避けられる場所を探し、木の洞に身を落ち着け、食糧を少しだけ食べた。少しく冷静を取り戻すも、いくら考えても埒なく、恥辱と寒さと絶望とのためにもはや死のうと心に決めていた。

数日後、雪雲は散って晴天となる。

殆ど朦朧となっていたウヴリアは人の歌声を聞いた。

男の野太い声で狩猟の歌のようだった。

どうやら猟師らしい。久しぶりの太陽が彼女に生きる希望を与えた。彼女は思わず洞から出て行った。

「お助けくださいまし」

猟師は最初愕いたが、これが噂の追放された巫女だと気が附いた。すぐに周囲を見廻した。彼女の生死を確認するため時折兵士が見廻っているのを目撃したことが立ったからあったからである。だれもいないことを確かめると猟師ガルヴは言った。

「哀れな娘よ。あなたを私が狩りに使う仮小屋にかくまって上げましょう」

ウヴリアは罪科を負わされた身を救ってくれようと言う髭面の男に手を合わせて感謝した。

「ああ、あなたはとてもご慈悲にあふれたお方です」

少女の双眸はこの地方に住む者が生涯見ることがない南の島の海のように輝く水色で光燦に揺れていた。髪は明るい黄金の瀧のよう、白皙の膚は雪よりもまぶしく、苺のような唇に頬にはもぎ取ったばかりの桃のような色が透けていた。過酷な運命と窮乏の数日も彼女の少女の美を損なうことがなかったのである。それは不幸なことであった。

人の知らぬ小屋に連れ込むとガルヴはウヴリアの両手を縄で縛って繋ぎ止め、散々に凌辱し、山暮らしに荒れた体で何度も慰み者にしたのである。

彼女は二ヶ月間監禁され、毎日のように辱められた。熊皮を羽織った猟師は食糧を運ぶたびにこう言ってウ

ヴリアを脅かした。

「おまえが舌など噛んで自殺しようものなら、おまえの腹を裂いてその赤子を取り出して悪魔の生贄にしてしまおうぞ」

だがガルヴの不自然な行動はその妻サルティアの気附くところとなり、或る日夫の後を追跡したサルティアが暴行の最中に小屋に乗り込んで叫んだ。

「このろくでなしが！　いったい、どう云うつもりなの、こんな小娘と」

ガルヴは堪らず、山に逃げ出した。すると妻は今度はウヴリアをにらみつけた。

「さっさと出てお行きこの淫売が、野垂れ死んじまうがいい」

嫉妬に狂ったサルティアの眼には哀れな少女が虐げられた被害者である事実が全く見えなかったのである。

季節は十二月であり、寒さは過酷なものとなっていた。暗澹とした雲が次第に厚くなり、吹雪が荒れ始めると、ウヴリアはようやく元いた樅の木の洞に帰り、餓えと寒さに苦しんだ。なによりその心は怯え、いわれのない自分の不幸に哀しみ、張り裂けていた。

破水が起こった。少女は長く苦しみ、何度も腹を裂かれる幻影に襲われ、産み落とすと同時に息絶えた。

第4章　僕が爬虫類だった時代

僕が爬虫類であった時代、世界は混沌とし、経験は限られていた。識別が限定されていたからである。

爬虫類であったそのころよりも遙か以前からあった志向性が全細胞を貫いていた。それは少なくとも単細胞生物であったときからあった。大蜥蜴の僕は岩山の上から遠く谷を隔てた大海に沈む黄昏を眺め、単細胞生物時代の記憶をたどっていた。だがそれは記憶と呼べるような代物ではない。明暗も冷暖もなく、一切感覚のない世界だ。ただ海底の亀裂からわき上がる硫黄の成分を摂取し、身体を伸縮し、分裂する。感覚を伴わないそれら体験が世界一切であり、当時の僕の諸概念であった。

比べれば爬虫類時代はより世界が広がっていた。僕は光や暖かさ、匂い、手のひらに触れる砂や獲物を噛む歯ごたえを感じていた。単細胞生物時代から遺伝子を媒体として累積され続けてきた諸概念はより精度を増し、世界はより複雑になっている。自分が動くということに限ってではあるが、蜥蜴時代の僕は運動空間と云う概念をも持っていた。それによって獲物を捕らえるため、もしくは敵から逃れるために自分がどのように動くべきか、その軌跡を描くことが可能となったのである。

僕はより広く、より精緻な世界を、よりリアリティを做すべく、自己超越し続けていた。世界が精度をなし、

より客観的な世界を獲得することは自己超越の度合いと比例した。僕は自己を脱し、世界へと超越するのだ。脱自し、超越し続けるには種として連綿と存続し続けなければならない。これが僕を貫いていた志向性である。

人間となった今もそれは変わらない。僕がリアルなサウンド、ヴィヴィッドな映像、新しい刺激を求めるのは、このことと無関係ではない。

人間へと超越してからは認識の精度が飛躍的に高まった。爬虫類時代には空間とは僕が動くことであった。獲物に喰らい附くまでにたどるべき軌跡であった。自分に関係なく、空間がそれ自体として存在することを理解しなかった。自己に深く閉じられていた。

僕は今、空間がそれ自体として存在することを理解している。僕が見ようが見まいが、僕にも他の生物にも均等に空間が空間一般として存在することを知っている。累積され続けてきた諸概念は巧緻を遙かに増し、世界は信じ難いほどに広大となった。星を見上げ、数百億光年先へも思いを馳せる。

生きるとはなんと不可思議な、無限なることか。僕は累積された諸概念の層を眺めるのが好きだ。その最古層は到底見極められない。恐らくは無機質であった時代から続いているのだ。そのころの諸概念を説明できるどんな言葉もないだろう。だが今と無縁ではない。これらの層には境界がなく、最古層から最新層まで分化しがたく融け合っている。

僕らの諸概念は理叡的なものではない。発芽や産卵、炎のように自然的なものだ。それは苔むす磐や偉大な山脈、果てしない海の波、野菊の美しさ、悠々と行く雲の流れ、雨に濡れた路傍の石、それらが時折垣間見せる、存在することの深玄さである。

僕らは遙かな過去から永遠に生きていた。諸概念は重層を成している。それは未来永劫、自己超越し、より拡がり、深まり、複雑に精緻に、リアリティを強めるために継続しているのだ。見よ、宇宙も拡大を加速させ続けているではないか。常に現状の自己を超越し、膨張している。僕らも同じだ。全ての存在は同じ志向性の下にある。

僕は病院から夜の九時に会社に戻って報告していた。

「先方の怪我は大事には到りませんでしたけれど、腫れが引くのに一ヶ月近くかかりそうです」

係長は苦い表情をした。意外にも彼はもっと軽く考えていたらしい。僕は逆にこの程度で済んで内心安堵していたのに、この男はどう云う認識能力を持っているのか。どうやら自分に都合のよいようにしか考えたくないらしい。これくらいの客観的事実を受容する脱自ができないようなら、種全体の利益のために猿からやり直す義務があるだろう。

事実は事実、上司好みの報告ばかりをすることは不可能だ。

「当座の治療費が四万円近くかかりました。保険者証が使えませんから」

課長が訊いた。

「君が払ったのか」

「ええ、大きい病院でしたから、銀行のキャッシュコーナーがありました。少し遅い時刻だったので心配でしたが、どうにか払い戻しができました」

課長が係長に言った。

「新卒の癸佐くんに立て替えさせておくわけにもいかんだろう。かと言って賠償責任の所在がどこにどれくらいあるかはっきりせんのに、会社の金を使うわけにもいかんし」

係長が一瞬眉を顰めたが、真顔を作って課長に言った。

「いえ、これは応急的に私が立て替えておきます」

「いや、そういうわけにも」

「いいえ、課長、これは私の立場の者がするのが妥当かと思います。たとえば課長以上のお立場の方が支払っては社として公式に非を認めたとも捉えられかねません。ここは私が出せば、私的な範囲として理解されると思います」

僕には詭弁にしか聞こえなかったが、点数を稼いでいる人の邪魔をする権利はない。

「そうか、まあ、それも一理ある。君がそう言ってくれるなら、取り敢えず、そのようにしておくか」

報告を聞き終え、課長はそそくさと帰った。

係長は苦虫をつぶしたような表情で僕の顔を見ずに三万九千七百八十円を渡した。

「その場は本人の保険者証を使って払えばよかったじゃないか。そうすりゃ、安く済む。君にもそのぐらいの才覚があってよさそうなもんだ」

僕は信じられなかった。なんと愚かな男か。

そんなことをしたら頭から賠償を拒否しているかのような印象を相手に与えかねない。

社の主催したイベント（運営はイベント企画会社に委託してあり、責任の所在、もしくはその分担の問題が生じていた）で怪我をした一般参加者の治療費の支払いに本人の保険者証を使うなんてことがありえるだろうか。たとえその支払いをこちらでするにしても、気分を害することは必定である。

第一に相手に対して不誠実ではないか。仮に道義的問題より会社の利益を優先するのだとしても不適切である。

言うまでもなく賠償がなされる場合は被害者の保険を使わないのだから、保険者証を使わせるということは、そのつもりがなくとも、被害を受けた相手に対しては賠償する気がないという印象を与えかねない。こういう事態は心情的なものが話を大きく左右する。会社の利益を考えるのであれば、とるべき手段ではない。

確かに相手は人の良さそうな男性だったのでその場でそれに思い至らなかったかもしれない。だが後から考

える可能性がないとは言い切れない。僕だって瞬間的には保険者証が使えればとも思ったが、その考えがとんでもない考えであることにその場ですぐ気がついてやめたのである。

僕は猛然と憤りが込み上げたが、抑制した。

なぜならそれは自分の判断を否定されたことに対する憤りだからである。つまり自己に固執し、脱自的ではない。存在の本来のベクトルに合致しない。つまり苦しみの道でしかない。僕らの幸福は脱自性との合致にしかないのだ。

僕は改めて自分の諸概念の層を一つ一つめくって考える。これはかつて動物だった時代、敵があらわれたときに毛を逆立て怒りをあらわに威嚇したことと同じである。両生類時代に天敵に向かって毒汁を飛ばしたことと同じである。生命の危機、自己の存在が無みされることに対する烈しい拒絶反応である。それなら種の存続という目的には合致する。

だが同時に脱自という目的には乖離する。そう、存続は脱自の拡大継続の必須条件であるが、その志向性は本質的に矛盾するのである。

ともかく僕は今係長に否定されたからと言って存続不能になるわけではない。だから抑制したほうがよい。可能な限り命を顧みないことが、本来の目的に合致する。僕らの眼にそういう人たちがかっこよく、好ましいものとして映える理由がここにある。

会社を出たのは十時過ぎだった。

合コンの予定だったが、もう一次会には間に合わない。もし二次会にまで繋がっていれば、参加できる可能性がある。僕は同僚の携帯に電話した。呼び出しているが、出ない。留守番電話サービスに切り替わってしまった。恐らくは二次会でカラオケにでもいっているのだろう。音楽や歌声で着信音が聞こえないに違いない。

思慮した。気分を変えるために是非合流したかった。脱自的になろうと意識してそう簡単になれるわけがない。それができるなら進化に数億年もかかりはしない。重症でなければ、外へ眼を向けることが一番手っ取り早い鬱憤の治癒法である。それに今日は金曜ではないか。

最初のレストラン『アッシジ』は六本木交差点の近くにある。あの辺で飲み食いした後に僕らが行くカラオケは二、三軒しかない。順番にあたってみよう。

だが僕は念のため、『アッシジ』に立ち寄った。中世ヨーロッパ風のデコレーションをしたイタリアン・レストランだ。

入り口から覗くと白いシャツに黒チョッキ黒前掛け黒ズボンの男が寄って来た。

「ご予約のお客様ですか」

「いや、実は」

僕は事情を話し、彼らが既に店を出たことを確認すると（無駄だとは思ったが）行った先がわかるかどうか訊いた。むろん応えはノーだ。

僕は再び外へ出た。三件目のカラオケ・ハウスに近附いたとき、同僚の猫間が出て来るのが見えた。時計を見れば十一時近かった。

「もう終わりかよ」

「なんだ、彝佐。今までかかったのか」

「そうさ。仕方ないだろう」

他の同僚二人と女の子四人とが出て来た。猫間が彼らに声をかける。

「おい、彝佐、来たけれど」

家が遠い子がいたのでやはりそのまま解散となった。一応その場で僕は女の子らに紹介された。「これが今日来るはずだったんだ、彝佐早蕨（さわらび）。おい、おまえもなんか言え」

僕は遅れたことを侘びた。女の子が三人ともかわいかったので残念だった。化粧品販売会社に勤めている子らで、喬木由伽（たかしきゆか）さんという人が猫間の知り合いだった。大学時代の親友の妹とかいうことで、先日それを洩らしてしまったがために、合コンを企画せよと皆から責められ、今日の会合がなったのだが、猫間だけはあまりはめがはずせず、楽しみ切れなかった様子だった。

僕は由加さんに釘附けになっていた。

睫毛が強烈に長い。瞬きは重たく、ゆっくり羽ばたく蝶のよう。あでやかな反りぐあいがラテン系だ。一重の眸はよく言えば涼しげ、少し冷淡に見えるが、一重瞼に対して不釣合いなくらい長い睫毛のために、蠱惑的な人形のようだった。

僕は猫間が一昨日言った言葉を思い出す。

「親友の喬木はな、少年時代ずっとコロンビアにいたんだ。おふくろさんがコロンビア人でね。ラテン的な顔立ちだよ。むろん親父は日本人だがね」

しかし由加さんは父親似なんだろう。全く日本人にしか見えなかった。それでもどこかが違う、そう感じさせた。

たとえば彼女が笑うと金の燦々を周囲の空気に鏤めるかのようにであった。彼女は背が高く、顧慮のない、強く高らかな笑い声だった。

僕は少し恍惚を覚えた。くっきりとした頬は照るように強くつややかで、ぴっちりと締まった顎のラインに沿う瑞々しい皮膚の滑らかなきめ、いずれも薄っすらと小麦色がかり、全体に黄金の輝かしさを帯びている。その生命の横溢と燦然との一切がまばゆかった。

大理石を穿って滑らかに仕上げた像にしてアクロポリスの丘、パルテノン神殿の奥に飾りたい。現実はかく

て聖化される。

第5章　聖句

私は日本間にいた。

閑たる板敷の方丈、三方が開け、強いてさえぎるものを言えば隅の柱しかない。間を縁取るよう囲む板廊下の向こうがすぐ庭、私の前後に風が往き来する。

正面は庭の枯山水、左に飛石の露地を護る垣根、右手ただの庭があり、その尖畑の畝であった。背後には六枚の襖絵、くすんではいるが、精緻に貼られた金箔の上に打ち殴ったかの荒々しさで太く墨滴の龍が画かれている。原初的な意匠で、神気が雲のよう燻るとともにいく許か呪術的で、漢字の『龍』の初期象形のかたちにも似ていた。

私は端座していた。

庇が深く、沈黙が微動もせず方丈に嵌っている。素足の甲に板間の涼しさ。半眼にしている私の眼は枯山水を見るともなく見ていた。白くて細かい砂石を均し敷いて、まっ平らにし、その上に奇岩を置く。擲ったかのよう近く、或いは遠く散じたその不規則さ、または人工的平面に抜き出た自然石の唐突な粗さが、金属面に走る毛筆の墨蹟の与える妙義と同じ、裂帛の快を狂燦させている。

自爾（じに）に応（あぶ）なし
ぐわてるぐぐわてるぱわらぐわてるぱわらそわんぐわてるぱふでみすぶわは

存在とは脱自的志向性の現象化なる〈脱却への欲〉の便宜たる〈理叡〉の効果によって映ずる心的現象〈了解〉に做さるる他者異叛客観性を以て〈意識〉たるもの。事象一切が非情なるは、これゆえ。晰らかに捉えんと眼を凝らさば精燦に眩みて焦燥を覚え、知にこれらを省みんと欲し、能くその経緯に分け入りて覧ずるも、ただ渺茫にて奇異に〈理叡〉あり、〈了解〉あり、〈意識〉たるのみ。意義本質を観ぜず、理叡性の片鱗すらも感受に映ぜず。さように仕組まれたるにしあり。以て現実性の証たる非情性に装甲されたる他者異叛客観性、その実効を做す。とともに範疇を免れぬ諸概念を脱するやにも映え、清爽の快とも〈了解〉さるる。「非情は与せず、厳粛均斉、即潔白」と。

異叛に苦しむも、無尽の堪能に焦燥するも、空漠に自失するも、清爽快たるも、いずれもそのゆえ同じく自爾

たるにしあり。自爾感受の仕方に応じて差異あり。現象を本質とせば異叛にしかず、観ぜんと欲さば精緻燦爛、義を求むれば非情無義、妄りにせずば清爽と云ふ。ゆゑは知られず。さふ云ふ力学なり。　志野の碗　自爾に応なし　空とぞ云

（以下、抜粋）

謐の漲り躍る大楽がありまするれば、これも道理かと思う次第でありまする。すなわち妄執を擱くならば、その人為性を免れ、完全なる他者であり、完全なる客観性であるところのことが非常に清々として感じられる為、諸概念をば附そうとする抒情も鬱勃せず、放下したまま、敢えて妄執を抱かない。

人為から乖離した無情性が多くの地域で神聖と崇め奉られている所以もここにありましょうぞ。

古来本邦においても、神道は清々を重んじ、元来は人為の做せる社殿などなく、現在にもまだ鳥居の尖には那智の御瀧があるばかりの飛瀧神社、或いは三輪山の山裾に鳥居が設けられるのみにて天照皇大神をお祀り申し上げる檜原神社などがありまするが、実にこれなども人における真が致すところであります。

いざや、そもそも小生ら謂う理叡や了解やも、飛瀧や檜原の御社のよう、無情なる即爾自然と違わず、清爽たらざるや。理叡、了解ぞよと小生ら、得心気にも語るも、意識に映じ現われたる事象の何をか把捉し、何をかわかっているでせうか。

事象の構築を做す諸概念のかくなるすがたかたちに措かれたる論拠をば知らざる。諸概念とは理叡を礎としたる解を以て做さるるも、小生ら解するところ曷ぞやを解さずば了解ただ唐突。そもそも諸概念いずくにか理叡性のあるか。殺伐たる物象とあらざるや。諸概念の本質たりて諸概念を支ふる原理たらん理叡まさに理叡として観取され、実在し、了解を以て晰らめ、理叡性を帯びたるが、さてもよく顧みすれば、そこにあるは『理叡』にしかず、その尖、漠としてわからぬまま。理叡を做すとは雖も而も問ひに応なし。ふ。

これはもう無知と言うよりか、非知と言うべきでせう。理叡が知と云うものの真髄を做せると措くならば、これ無明にあるとするは既に知る知らぬの問題にてはありませぬ。非知（知に非ず）と曰すべきでせう。

それに貴殿よ、なおも言及すれば事象を『把捉』するとは言うも、それはいかなる行為でせうか。そのような仕方を択んだのは、小生らでせうか。どこぞからそのかたち、輪郭をば思い附いたのでせうか。

またもし最初にあらゆる可能性を孕み、あらゆる選択肢の選択が可能であった時代があったとしたならば、どうしてこの『意識』と云うかたちを敢えて択んだのでしょうか。做されたこのかたちが何であるかをわかっておるのでせうか。

さような数々の問いに小生らは一切応えられませぬ。元よりこれら一切、ただ脱自への志向と云うFORCEでしかなく、物質的現象であるも同然なるものであるがゆえ、意義本質など言いようがないのです。

何よりかまずは結論ありき。よってこれに至るまでの経緯や根拠、理由や必然性一切が脱自を做す為に仕組まれた絡繰りの為の空架、形骸にしかず。いかにしてそのかたちを択んだかなど求問しても得られようがない。

ならばどうでせうか。以てまったくメソポタミア原風景、魚鱗、能楽、シテ島古写真のセピア。路傍の石らと何ぞ変わりませうか。

かように理叡及び了解とも既に理叡及び了解に非にしありては、はや自然の風物、諸概念もまた非知なる物的現象、是も非もなし。

附言せば、非知なりしと云納得（ふ）へとかくも導くは、これ真実にあるや否やよりかは、脱自快楽ありやなしやに負うて候。

されどかように熱弁捲くし、熱慮熟考せるまでもなく、小生らの知性一般もまたインパルスの伝わりと云う物的現象ではないでせうか。よき所説がござりまする。そら、ここにこれ、小生畢生の哲学的大著ありしかば、精髄を抜粋し、今読み上げ進ぜませうや。それ、即説咒曰（そくせつしゅわつ）！

『ニューロンの軸索にまでインパルスを伝えられ、その尖にあるシナプス小胞を刺激され、神経伝達物質（グルタミン酸とか）を分泌させられ、受側のニューロンの樹状突起にある受容体に向かって分泌物を発射させられ、受側被膜のナトリウム・イオンの伝達経路を開かれ、細胞外のナトリウム・イオンを入れられ、カリウム・イオン濃度が高かった細胞内のナトリウム・イオン濃度を上げられ、内外の電位差を逆転させられ、静止電位の状態を発火的現象（インパルス）せしめられている。

これを以て畢竟、諸概念とは奚ぞや、と糾されても答えようがない。ただ、唐突に了解が生じ、納得と云う心的事態が起こっているに過ぎない。精神だの、思考だの、理性だの、観念だのと言ったって黴の繁殖や歯類の繁殖と何ら変わらない。アメーバの分裂に同じ、ウィルスの活動との相違なし』

まさしくそのとおり！　素晴らしい。歓楽である。素敵にて候」

「いや、そうですとも。いやいや、ごもっとも」

「しかし小生が嘯いた傍証はインパルスがニューロンからニューロンへ伝わっていると云う、客観的な事実観察に基づいています。

この手法は客観実証主義の基礎ですが、もし一切の事象が映ずるところの意識が正確、妥当であることが実証できなければ、かような諸概念＝インパルス説による理叡の無効性の論証はまさしく無効となりまする。（有効であろうとも、それゆえ無効になってしまうのですが）

意識の妥当性が実証されなければならない。しかしどうでせうか、これを事実観察や実測データ分析や数学的理論に基づきて実証せんとしても、まず第一にそれらが載る土俵が意識それ自体にあらぬことはあり得ない。いかような実証法であろうとも、未だ証明済まざる意識それをば用いずには為し得ない。いかならんとも妥当性をば証せんと欲すならば意識に先んじ意識をば証左せずばならなくなるが必定。さようなことが為せませうか。

為せぬなら小生らの意識に確かさを得ることが能わない。

だがいかにあるとても現にこれら感じらるるものにしあらば、感じると云う、少なくも小生らにとりての事実として、小生らの現実に在るもの、実存において存在するものたるを否定するは不可能事に候。人紛れなく現実に苦しみ、切実を感じる。その事実を認めぬことは到底不可能事にて候。見よ、現実は変更しがたく厳と聳える絶壁なり。他人事の顔をばして無表情なればこそ、かくも現実なりと嘆かるれ。無慈悲なればぞ、これよりか眼を逸らすことかなわざる。

さよう小生らの切望一瞥だにせず、傍若無人の他者と叛きて非情の暴虐為すにかくも強く現実と感じらるるにあらずや。

たとえばここに一つの林檎を観ぜよ。まさしく人間は原的に林檎を林檎と直観せり。

そして顧みよ。それ林檎をば是とも非とも決しがたし。当然なり。それいかな論議をば醸そうとも人間の現存在なり。あたかも生活世界に頑として存在し、空間に延長してこれを占拠し、何よりか事実として迫真せしかば原的直観のまま屹然として聳え、諸概念を附さんと妄情せる人間どもに埴の無表情を露呈する。

されば既に林檎には非ず、非ずとは非じ。

迫真をば做す迫真性なり。只管迫真性なり。一切抒情、諸概念を排斥し、爬虫類よりか情なくその表情なく、物的にて無味乾燥し、埴の面のごとく虚空なる物性、非知にしあれば、人は知る、これ捉えがたく、理叡を絶し、畢竟空なり、と。

現実性とは惟空性(これ)にこそしあれ。ならばこれ、いかでか林檎たりと映ず。しかしこれ、逆にまた問えよ。林檎たりて映ずとはいかんやこれ。知らず。ならば同じならずや。一切諸概念を排斥し、とてもかくても林檎たらんと。またゆえに迫真と謂わずか。

さりとても、それ一切を排斥す迫真性もまた諸概念のうち、理叡の生みにしものにしあり。かたち做すがゆえに理叡の産物なり。たとえ諸概念ただインパルスの伝達でしかなく、物的現象にしかずと措定され、理叡性が欿如せりと認識さるるも、そのこととてかたち做し眼窩に映ずはこれ、独りただ理叡にてのみ可能たる伎にしあらずや。

而し繰り返し申さば、小生らの理叡それ、理叡に価わざるもの。唐突に了解と云ふを做し、汝惟れを解し了われりと宣すも、斯く云ふ貴君は何者かを問ふに応なく、ゆえなく聳肯なるにしあれば、森羅万象満遍なくにさまやかたちを與へ、これをこれとし、晰らめ做すとは雖も、而もそれ『理叡(ふ)』と云、只管さふ云ふもの、理叡性をば欿く異端異物にしかず、小生ら畢竟虐非を観ず。

しかのみならず理叡が理叡性に異なりとは云ふも、理叡の特性をば叙べ、他との差異を示す、理叡性と云ふ、ことの趣を見るも渺茫、ゆゑを照らせど奇異が映じ、一向知らず候。

理叡たる本質をば支え、理叡の特異性を云ふ理叡性すら小生らが認識に菌黴の様相を呈し、物質も同然の殺伐、無味にて乾燥、雲をも凌駕せる峻岳の岩膚のごとくに無表情を做す。自爾(じに)哉。自爾とは理叡に做さるる経緯(いはれ)

なくして自ずから爾なるもの。理叡性またこれに異ならずば理叡と物とに差異あるものかは。されば斯く云ふも何かは。志野の碗にしかず。

清爽たり。清爽たりとは雖も、而も氷壁の屹然たるがごとく聳え、光芒燦然たる晰らかを以て人情を斥し、異叛做すもまた事実ならずや。

何となれば人、自らの髄に嵌まる各致の肯をば情し熾り妄執、他者性を做し、自らの欲するところにかより益々裂かれ千切らるるものにしあれば。基い他者性これを免れざるは異叛を生ぜしむがことその一切の目すところにしあればなり。曷ぞ不可思議あらんや。

ゆゑ万象在り。人、愛すれども愛かなわず、時勢、名誉、権力、財貨、賞賛、子孫、眞實、正義、崇高を得るともこれ廃るか、得てもなお飽かず耽る。円寂成就するところにあらず。意識を構築す。意識は遣るのみにても悉ぐに異叛に戮ふが義。さりとても清爽異叛同じう理叡にしあらば、差異はあるとても何かは。『ゆゑいかに』　汝、未だ問ひ給ふや。虚し。

ただ世に横溢せるは拡裂強大超剰増膨精緻鮮晰をのみ欲し、意義本質もなく志向せる力学、脱自させんと身をも裂かせ砕かせ翔り躍らするFORCE、ただこれにしあるのみにしあれば。

故 飛瀧檜原のようただ清爽たれ。今考へらるる限り最善、最高、最大、最強、最裂の脱自へ、幸甚極みの涯へ、寂滅為楽做す狂騒乱舞の猛疾へと静謐され給ふこと必定に候。

さてまた顧み考ふれば、その片鱗これ、レプリカ『卯花墻』の土味無情なりとは言わず

（以上、抜粋）

参考文献　或る草稿（未完成）

一切の存在は畢竟意識であると云う言い方ができる。この際において言われる意識とは通常考えられているようなものではなく、全く未定義な状態の術語とする。ともかくも所謂「現に眼前にある現象」である。このとき「現に」とか「眼前に」とか「ある」とか云うのも全く未定義な術語とする。なぜなら我々と云う主体があって現にその前に対象があり、それを観察していると云う構図自体が全く未証明だからである。

このようになるべく無条件な前提を避けるが、とても限界があり、我々は証明されていないものを無条件に前提として措定しない限り、一歩も論を進められない。

さて、我々にとっての一切の存在は意識であるとし、また意識とは畢竟概念であると云う言い方ができる。我々は物事を意識として捉えるが、それは諸概念としてまとまりを持つのである。諸概念とは一つの了解であるとも言える。そして了解の解とはそれが理叡に従って構築されていることを依拠として解の解たる面目を保っていると一般的にされている。もうこのことは直観と云うもの以外の何者でもなく、論理も科学もないが、一応このこと自体もまた一つの現象として理叡によってさように解されていると通常考えられている。

そこで我々は存在の分析にあたって了解の何たるかを省みることとしたとき、戸惑いを覚える。少なくも我々が物事を了解するにあたって必ず援用したはずである「理叡」と云うものに改めて照らし合わせて解さんとするとき、渺茫として得るところがないからである。我々は林檎を手に取る。これは何かと問う。林檎である。これでは説明にならない。或る特定の種の樹木に生る果実を言うものである。だがそれは言葉を言い換えただけではないだろうか。ならば果実とは何か。何かであるとはどう云うことか。そのように問い続けるうちにやがて我々は、つまりはこれです、と実物を指し示す以外になくなる。これは理叡的であろうか。これで肯諾するならば、ただのすり合わせである。了解と云うよりかは納得と云う心的状態に過ぎない。少なくも我々の理叡的判断と謂われる習慣においてはこれを理叡的な説明とは呼ばない。

とすれば我々の解を構築するロゴスである理叡とはいったい何をしているのか。我々は理叡を省みてあ然とする。改めて理叡を省みてあなたは何を見出すか。少なくも私には何も見出せない。理叡とやらの効能を眺めるが、そこにあるのは我々が「理叡」と呼ぶ異端異物でしかない。それは異様な過去の遺蹟のようにもはや理解できない、奇妙な無表情さで虚しく聳えている。その理叡のどこに理叡性があるか、だとすれば我々は何を解していたのか。先も叙べたとおり、納得と云う心的状態があっただけなのである。

理叡は理叡性を持たない。了解は根拠なく忽然と、経緯もなく唐突に現われる納得の情に過ぎない。理叡とは、我々が必ず心に期し、既に知っているとおりに理叡的な理叡を以て物事を我々に了解させるものであり、我々が物事の了解を省みるときに理叡性の片鱗もなくば、それは理叡ではなく、理叡は存在しないことになる。これはいったいどう云う状態を示唆するのか。つまり我々は実際にはどう云う状態にあるのか。

我々が理叡を以て了解していたと思っていた物事は理叡的に了解されていたのではないことになる。我々は何をどう了解していたのか。つまり我々は現にどう云う場所にいるのか。我々が必ずや心に期し、既によく知っている理叡的な理叡は存在しなかったのである。

理叡がないならば、理叡的な意味性はない。意識に捉えられているはずの理叡的内容はない。理叡によって解されていたと思っていた理叡的な意味・本質はない。意識に意味性を以て本質表現されていたところのもの一切が理叡的には無効であると云うことになる。

とすれば我々がかつて信じていた理叡的判断の習慣に従って、根拠がないこの理叡は非理叡的であり、非理叡的なものは理叡ではない、と云う判断もまた、理叡的には無効と云うことになる。

だが理叡の無効性と云うことも、かつての理叡の範疇を做す一つの捉えであり、同じく理叡的な判断の習慣に従ったものであれば、理叡的な意味・本質を做さず、「理叡の無効性」と云う構築物もまた理叡的には無効とならざるを得ない。さらにその無効の無効自体が理叡的な判断であり、同様の構造によって無効となり、と云うことも同じく無効となる、と云う無限遁走曲を做す。

結局は無理して諸前提の無条件措定を受諾したのに全く同じ状態に還ってしまうのである。

我々の感受は放置したまま、存在を定義することができない。

すなわち意識とか了解とか、或いはかつて理叡と呼んでいたものは、我々の感受においては問うても応(あふ)のない路傍の石に過ぐざるものとなってしまうのである。

意識は路傍の石のように表情のない無機物である。我々の了解は全く無根拠な忽然であり、経緯なき唐突であり、言わば自爾的である。自爾とは何の経緯も理由も根拠も由緒もなく、爾自(これ)ら因として爾を做す者、爾焉がゆえに爾做せる者を云う。旧来の理叡的見地からすれば殆ど傍若無人なる暴虐である。人間にとってこれは異叛であり、人間はこれに異逆を感じる。

そう、まさに異逆性だけが確実にある。我々はいくら理叡性が欲如し、その意味内容が無効だからと言って迫り来る弾丸や怒涛や疾患の苦しみや飢渇を嘲笑できようか。それらは現実として切迫する。理叡性など欲片もない無条件、説明の決着もない、納得と云う情の逝き場もない、道義無用の動かし難い無情、所謂現実として感じられるのはこれがためではないか。現実が現実性を帯びているのは、知性の欲片もない土偶の、洞のような眼窩のごとく無表情な空であるからである。

空とは現実性である。

人間はこの現実性の暴虐に堪えられないようにできている。すなわち理叡性への期待を植えつけられている。それが理叡という幻影のあった意味と言えば意味である。

意識は理叡に拠って構築されたと云う見掛を做していたが、実際は暴虐的なFORCEに異逆を感じさせられることによって做されている。ア・プリオリに期待されていた理叡性は欲片もないが、実はこのことには重要な意味があったのだ。我々に異逆を感じさせるために我々には理叡への期待が与えられ、かつ理叡に拠って理叡が非理叡性を帯びていると云う見掛が与えられているのである。かくして異逆に対する気遣いとして意識は成立していた。

これが人間の生きると云うことの全体であり、このようにして存在と云うものがある。

意味性を超越し、歴史性に支えられた現実のFORCEが必要である。

第6章　大原理

空腹の喩　痛み痒みも　全ては我々に無味無臭　直な映像と思われるものさえ　一切は解釈である　水も下から上に落ちる　ただ人間に自由にできないだけ　そもそも我々の存在がその上にある（と観ぜられる）全て考えである　諸概念の輪郭　了解は了解ならず　思考とは諸概念から諸概念への移行　移行には運行規

則がある　規則制定もその輪郭も不詳　只管ここにいる（直観＝繋辞）

我々にとって一切は諸概考としか直截には観ぜられない。具象抽象を問わずその一つ一つを泛べるに、我々は了解しながらもその考概の輪郭がそう云うふうに定められた根拠を知らず、畢竟省みれば巧緻な理叡の解をなしておらず、つまりは了解をしておらず、只管納得と云う心情があるのみである。ゆえにそれらは非理叡であると云う判断に運ばれるが、このように思考とは諸概考から諸概考へと移行する際に何となく納得の情に導びかれることであり、運行規則を持っているが、規則の妥当性どころか、制定の根拠も自体が何であるかもわかっていない。なおかつこれら全体がこのように直截に観ずるように導かれたものでしかない。としか直截には観ぜられていない。只管に直観＝繋辞（にんにいる）のみである。どのような結論にも安らげない。この現実にあるのみである。

現実、真実、事実、とは何か。我々は数千年にも渉って様々なかたちで解明しようとしてはいまいか。だが我々はなぜ求めずにはいられないのであろうか。蓋然性を実証する実験の結果が究明した原理の真実性を晰らかにすれば有益である。現実に有効である事実であることが直観されるからである。だが人が死ぬことが現実であり、真実であり、事実であると知りえてもそれが死を解決したことになるであろうか。現実、真実、事実が人間性に異叛すると思えないか。問い質したくはないか。現実、真実、事実が持つ強権の正統性を弾劾したくならないか。具体的な技術の実証は即効性のある救いではあるが、根治ではなく、真の問いへの答でもない。主旨を慮ればもっと根源的に問うべきことがないか。そもそも死が現実、真実、事実であるとは言っても、かくも暴虐なる絶対専制がなぜ許されるか。現実、真実、事実とは何者か。どう云うことか。だからと言ってそれが何だと言うのか。答があるか。答とは何か、問いとは。しかもそれらは疑問符の一例、ほんの前哨でしかない。

いかなるものであっても我々は我々が原的に直観するものを是認せずして我々の思考の運行規則に準じた正統なる、明晰な論を捗ませることはかなわない。解釈も説明もなせない。零の状態から論理のみで積み上げられた明晰なる理解を構築することはできないと直観されているからである。

たとえば犬と云う概念がある。しかしそれは何か。我々は犬を了解してはいる。了解はしているが、省みてそれを観ずるに説明ができない。人が説明であると思っている説明の実情はまず語の言い換えであって必ず次の説明を要し、それ抜きに考えても属性に終始する概説であって本質などではけしてない。試みに犬と云う概念を髣髴して観るも、我々が見出すものはただ納得と云う心的現象あることのみで他に何も見出せない。既に解し了わったと言うが、我々は犬と云う概念がいまあるかたちを做すに至った経緯もわかっておらず、なぜ違うかたちで犬と云う概念を做せなかったか、このかたちがどのようにしてどのような了解を構築しているかも

わからないと云う状態にあり、すなわち我々は了解しているとは言っても、明晰さなど欠片もなく、普通に運行規則に照らす試みのうちでも何ら了解を做していないことやら只管納得の心的現象のうちにあるのみと云うことが判明に直観されるのである。

かように思惟を挟ませて判断へと運行する規則があることは直観に晰らかで、たとえばそう云う経絡を意識に捉え、規則がどのように定まったどのようなものであるかを論究しようとしても直観のごとくであって経緯もなく唐突、忽然たる自爾性を帯び、暴虐な FORCE である、と云う判断に陥り至らざるをえない論究の挟みもまたまさしくそれそのものである。

なお自爾とは根拠や原因や経緯等々に依らず、自ずから爾なることを謂い、よって思考の運行規則に暴虐であり、準じた解釈しかなしえない我々には経緯なく唐突、拠なく忽然たるものであり、人間性に異叛する只管力学的なるもの、無機質な FORCE として映ずる。原的直観などもこの例に当該するものである。

人間は諸概念や思考の運行規則に類する意識行為一般が本質に理叡と云うロゴスを持っているものと暗黙に期待しているが、実質は右のとおり所謂理叡性のない FORCE であり、只管力学的な無機質なるものであって、理叡が意識行為をそれにならしめるものとするならば理叡は非理叡性を特性とする自爾的 FORCE である、と云う判断へ逝くようにしか我々の思考運行規則は挟ませてくれないのである。ただし飽くまでも直観する限りにおいては、である。だが、畢竟、それでしか我々の存在はありえない、と観ぜられてはいまいか？

直観でしかないから根拠脆弱であると云う批判も規則の導くところでしかないと云う限界附のものである。それゆえやはり論として脆弱、と云う批判もまた規則上でのみ有効なものでしかない。かようであっても知るとは何か。それすらもわからずに我々は問い、何をしようとしているのか。

我々は我々の規則に従って我々が求めさせられているものを求める限り、陥らざるをえない絡繰りに組み込まれているかのように観ぜられなくもない。永劫たどり着けない装置として意識が企てられ、構築されているから当然のごとく陥るところに陥るかのように観ぜられもするのである。

いずれにしても我々は導かれていくところに導かれているに過ぎないのだから、何をどう言おうが同じにも感じられる。それすらそう観ぜられるところへ導かれるからでしかない。思慮の源泉が知られないのに、自分で考えていると思うことは我々の運行規則に反する。

観ぜられることは我々が観ずるその観に、我々と云うものがいると云う感覚である。観ずるとは何か。観ているか、観ぜられているか、受被か、企投か、それらの判別すら択べない。思考と云う運行が行われているようにも観ずるが、運ばれているか、運んでいるか、その区別すらも定かではない。観にあると云う茫漠とした観がいずれも知れずわくも、それがどう云うことか全く分明ではない。全てが知られないところで他人の顔をし、勝手に行われているかのような異隔覚、無為渺茫としか観ぜられない。我々は観のありのままに、その中途に茫然とたたずむのみでしかない。どう云うことが起こっているかわからないが、とてもかくても『直観』のま

ま繋辞。それだけか、強いて言えることは。もう言葉がない。

釈尊は死の病に斃れ、阿難多に訴えた。

「喉が渇いた。水が飲みたい」

仏陀到来の噂を聞いて表敬のために壮麗な装いを凝らし、飾られた車に乗って勇敢な従者ら数多を率い、横臥する老人の前に立った王は驚き訊ねた。

「世尊よ、私は解脱者が不死であるものと聞いておりました」

釈尊は静かに諭した。

「すべては滅び行くものである。私は常にそのように説いた。どうして仏陀がそうでないことがあろうか」

「しかし世尊よ、しからば解脱者とは何でありましょうか」

釈尊は静かに諭した。

「ならば王よ、もし仏陀が仏陀となって無常を免れるものなら、彼には常態への執著が一切なかったと言い切れるだろうか。無常から遁れることは無常の超越と言えるのであろうか。

私は死を免れることを欲して清浄道に入ったのではない。もしそうならば生存への執著を遠離したとは言えない。死を免れても死を免れたいと求欲する気持ちがあり続けるならば生存への執著があり、解脱者とは言われない。

私独り死を免れてどうして私が仏陀であるなどと言えるだろうか。明確に記説しよう。死を免れることはない。それが法である。現実である。すなわち正義である。義しいからさようあるのである。自然が導く場所は義しい。この叙説が真実に基づくかと問うか、王よ。真実と云う考概のふち取りがそのかたちを編み出された経緯すら知られぬと云うに、晰らかな解脱へと導く仏教を猜疑することにいかなる意義があるか。

人が死を免れぬは法である。死は義しい。

よって王よ、悟れる者である仏陀がどうして変じようか。涸渇し、飲み水を欲する」

私は日本庭園の蹲踞の水面に赤みの強い褐色と黄とに染まった朽葉が泛ぶさまを見つめていた。

第7章　冬物語

早蕨はコルネリアーニの背広で装っていた。年寄りが独りで経営する、老舗ではあっても有名ではない某洋品店で見つけた。二十年近くも前の品で、生地は織目のよくわかるざっくりしたタイプだ。

腕時計を見た。中古で買ったそれは文字盤がイタリア・カラッラ産の大理石で、シエナの時計塔と同じデザインの針を持ち、その名も『シエナ』。黒地にかすかな白の縞目の模様が泛んでいた。

マテリアルは物語る。

東京に来て広告代理店に一年間勤めるも、営業に嫌気が差して辞める。たまたま見たアンティーク・ウォッチ専門店のホームページのスタッフ募集をクリックし、彼は表参道駅が最寄駅と云う或る店の経理・営業担当者募集に応募した。早蕨はかつて青山学院の傍らで見かけた某店と勘違いしていたが、履歴書を持参し探し訪ねてはじめてそれが間違いであったと知るも、事前に調べもせぬマップルで見なかったことが既に運命であったと考え、意を翻さなかった。

樫材の木枠がいかにも厳しい『モディリアーニ』のガラス扉を開けると店主が片目に嵌めていたルーペを外し、額に皺寄せて顔を顰めた。思わず早蕨は口笛を吹くまねをして心の中で『じいん・かつくう』と詠った。その日はそんな五月の、雨後の昼下がりだった。

「一応訊くが、志望の動機はなにかね」

答につまった。訊かれることは当然想定してしかるべきであったが、まったく思料していなかった。つまり動機などなかったのである。

「知的で、美しい仕事だと思いましたから」

わるい答ではない、と思ったが、主人は訝しげに片眉を上げた。態度や表情から真情が込められていないことを見抜かれたのであろう。老人は歎息した。若者とはそう云うものだと諦めていたようだ。人材が得られなくとも、人員が必要だった。

彼は最初にカタログを提案した。良い印刷屋と写真家の友人とデザインの要領と単価の交渉と妥当な部数と色校正をする審美眼とを心得ていたからだ。金属の艶が魅惑的な小冊子が出来上がる。ホームページも刷新した。店主の倅が既成ソフトで作ったもので、いかにも素人臭かったからだ。出来映えは彼を満足させる。実際彼は美を愛していた。金属機械の美しさも。

毎日八時半に出勤し、精力的にチラシを持って廻り、誇らしくカタログを広げ、夜は伝票と帳簿とを整理した。早蕨は職が気に入った。給料の一部前払いも老人の頷き一つで決まる。そう云う感じが快かった。お蔭でどうにか家賃の支払日に間に合った。二十三歳になる。そんな暮れも終り、一月二十七日、彼は主人に言った。

存在は脱自的志向に基づく理叡によって構築された他者異叛客観性において做される。それゆえ理叡に意義本質性を求めようもなく、理叡性は片鱗すら感じられないよう仕組まれ、現実なる非情性を帯びて他者異叛客観性の実効を做す。であるとともに我々の範疇にある諸概念を脱すと云う意味では脱自的志向にかない、清爽の快とも感受される余地がある。非情は与せず、厳粛均斉にして潔白である、と。人、欣求して苦患を解すは道

義。また異叛清爽ともに理叡が做す受ゆゑ、実効在っても解に本質はない。

思考停止。それが我々の『感覚』にとっての真理だ。

真理と言えるのは現実性のみである。現実性とは只管現実であってその意義本質は空である。現実とは説明も把捉もできない無味乾燥無色透明を云う。だがそれは事実と言うよりか我々の嗜好ではないか？　なおしかし我々は我々の嗜好を批判する余地を持たない。

我々は実効性を求める。実際に要請を充たすものを求める。

なぜそうなるか理由や原因や意味を説明するのが科学であり、なぜそうでなければならなかったか理由や原因や意味を説明するのが哲学である。物理的或いは心理的空間を占拠する、すなわち顕われるのが存在であると説明するのが科学であり、なぜ存在があるのであって非存在があるのではないかを説明するのが哲学である。

「たとえば、『真理』と云う一つの概念を取り上げる。それは価値設定的な批判概念で、一つの捉え方である。意識のフィルターとなって特徴あるその色彩で区劃し、そのフィルターが持つ独特の色調で僕らを或る感情の状態に導く。

そこでこう云うふうに考えてみてください。『真理』を三角形の中にあって二〇度の鋭角を做す角に喩え、他の概念を同じ三角形の中のそれ以外の角とし、それら角度の総和が一八〇度を做すとき、なぜ二〇度が択ばれ、三〇度は択ばれなかったか、と。もし三〇度が択ばれれば、三角形から受ける印象は異なり、色合いは違ったものと感受される。三〇度做す角が具体的にどう云う概念であるかは想像にすら做せませんが、充分に疑問の本質は理解できるでしょう。僕が諸概念のかたちが択ばれた理由がわからないと常々言うときの、『かたち』とはそう云うことです。『真理である』とか『正しい』とか『当を得ている』とか云う色調の設定がどうしてそう云うかたちに択ばれたかがわからないと言うときの、『かたち』とはそう云うことです。

「畢竟、現実が真実だ」

「しかし」

「むろん夢幻や空想を否定するものではない。観念であっても現実に君が思考するものではないか。現実に君の脳裏か心か他のどこか、いずれにしろ現にそれはそのあり方で在るからだ」

「なるほど、しかし」

「そう、この原理はなんの役にも立たない。空気みたいなもんで毒にも薬にもならない結論だ。だがそれ以上になにが言えるであろうか。小生が実感する諸々の感覚、諸概念には理叡性が欽如をしているとか、また感得する概念には意味的な本質性が欠けているとか、そう云うことを果敢に拠りどころに据えてみても、それ以上の結論はない」

第8章　朽ち葉色に染めて

ここに石塊（いしくれ）がある。硬く、厳つく、表情がない。人への同情など示すべくもなく、掌にすれば粗い。いわれない唐突の無骨さがある。あたれば毀ち、下ろせば砕き、擦れば痕する。此れにあれば此れ、彼れにあれば彼れ、全くの無味乾燥である。

なわけで、去る十一月の末、私は天叡院の寂莫を堪能してやらふぞよとばかり、真兮（まことや）くんとともに出掛けた平衛隆臥（ひらえたかふし）、その人であった。

先ずは我らが古墳の里、龍呑村（りゅうどん）のメイン・ストリートを抜けて徒歩二十三分、我らは北風の中の存在者となるのである。ちなみにこの通りを侮るなかれ、参詣道に直結するこの道に限っては両脇を数十件の由緒ある旧家が隙間なく密着して甍を並べ、人煙疎らな山野田畑ばかりのこの地域においては異彩を放っている。一瞥には宿場町のような景色だ。

さてそれは本筋に全く関係のない余談で、短篇には邪道、で、参詣道とは逆に下ると県道六六号線、旧街道に突きあたり、龍呑神社前バス停がある。田圃の中にトタン屋根、風雪にくすんだ板壁の廃れたような風貌だ。

もうひとつ、このT字路には一日の平均客数が　2
1．人と云う手打ち蕎麦屋、昭和二十年代の朽ち果てた物置のような『娑婆訶庵（そわか）』があるが、あとは刈り終えて寥々たる光景ばかりだ。古墳と丘とその向こうの山々が望める。

「粗末な光景だ。凍えているね」

彼がそう云うのは古来茶人の言った冷・凍・寂・枯の美意識のことだ。

私はまたその手の薀蓄を開陳されると面倒臭いので応えなかったが、彼の家柄は地の土豪だから本業は農家なのだが、代々遊蕩者が多く、先のメイン・ストリートで百年近く前から骨董屋もやっているので、そう云う類の話が捲くし立てられることが頻繁なのである。

一日二本のバスに乗ること十五分、無人の真神（まがみ）線龍呑駅で単線一車輛の真神電鉄上りに乗る。畝邨（ほむら）駅を通り

過ぎ、薙久簑駅で天正勝線に乗り換え、南大門駅、中門駅、龍禅寺駅を経由、鳧斗神社駅を過ごし、安房松島駅で洩糺線に乗り換え、天叡院駅で降りればすぐに古道だ。丘を段々状に生垣の古民家数件、ほかは竹と楠と樫と椎としかない。いつも濡れているような緩い坂をしばし往けばよほど近くなってから見える。

「ああ、あれだね。

いやあ、これは善きかな、善きかな。

全く善きかな、善きことをした、衆善奉行。サッバパーパッサ　アカラナム、クサラッサ　ウパサムパダー、サチッタパリヨーダパナム、エータム　ブッダーナ　サーサナム（諸悪莫作、諸善奉行、自浄其意、是諸仏教）（中村元・三枝充悳　著『バウッダ　佛教　』一九八七年三月小学館刊行）」

そう言って真兮くんは立ち止まり、パイプに火を点じた。つまりは今すぐには入らんぞよと云うことだ。私ら男二人、呆と十分くらい佇んだ。

苔生しの茅葺、古りて侘びしく寂びれて、その筋から見れば〝豪奢〟ともいうべき高麗門があり、それが紅葉の藤黄やら梔子色、山吹・紅欝金、赤紅・真朱・韓紅花、常緑の葉などに隠されているかのように翳され、様々な色霞の重なりに絢爛なるも秋ゆえに儚く、実に美味なるものかなと舌鼓。

さて消火の後、門をくぐり、正面へ向かわず、脇を廻って迂回し、竹林の壁、入口のような抜け路があり、入ると吾深き外露地だった。呼吸が感じられるくらい瑞々しい濃緑の苔に蔽われ、時が止まったかのよう幽玄の雰く幹、水を打った飛石がある。

「まるで茶室に行くような風情ですね」

「いや、この尖には茶室があるのだ」

左に柿板葺きの腰掛待合があった。そのまま飛石をたどると延段があり、四ツ目垣が現われ、その向こうは内露地である。乗越石を置いた中門がある。入る。右に蹲踞があった。

真兮くんはしゃがみ、その手水鉢の水面に泛ぶ、緋を滲ませた褐色と橙の交じった黄とに染められた朽葉を凝視した。私も膝に掌をあてて屈み、覗き込む。

朽葉は木の葉の屍骸だ。その死に顔は美しい。美しい平穏な表情、それでいて深く、喩ようもない。

そのとき、ちょうど茶室の方から帰って来た人らがいて、呆れたように真兮くんと私とを眺めながら過ぎて行った。真兮くんを初めて見た人はだれでも驚くのである。

先ずは帽子だ。黒くて傘のように鍔が広い。東京タワーのように尖った山を持っている。だがタワーは途中でご愛嬌のように折れていた。

ポケットからは時々、片眼鏡を出して気取って眼窩にはさむ。メフィストフェレスのような尖った鼻から下は口髭に覆われていた。頬も頬髯に覆われている。顎にも顎鬚が繁り、臍のあたりまで垂れていた。

髭に埋もれた口に四六時中パイプがくわえられ、噴煙している。キャラバッシュ・パイプと云って南アフリ

カ産の瓢箪の一種を加工した大型のものだ。シャーロック・ホームズが使用したシルエットがつとに知られているが、コナン・ドイルの作中には出てこない。

夏は襟の広い、大きめの袖が肘までくる。ペイズリー柄のTシャツを肋骨の浮いた上半身に、少し涼しくなればその上に色褪せたサテン地のシャツを着て、冬はくたびれた膝丈のアーミー・コートを羽織る。

アーミー・コートと言っても、紫に近い濃いめのフレンチ・ブルーで房飾りや飾り紐、肩章がついている、これもサテン地のものだ。『Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band』のLPアルバムのジャケット写真でザ・ビートルズが着ていたものとかたちが酷似していた。

穿くのはいつも擦り切れた細身のリーヴァイス、蛇皮のロング・ブーツはよれよれになってたるみ、ずり落ちた緩いハイソックスのようになっている。

腰で穿くきついジーンズのポケットには古本屋で買った文庫を差していて、大概ハイデガーか、レフ・トルストイ、ユイスマン、ニーチェ、高橋源一郎、マラルメなどである。デジタル・ミュージック・プレイヤーでキング・クリムゾンの『Larks' Tongues in Aspic, Pt. II』か、レッド・ツェッペリンの『Whole Lotta Love』を猛烈にイヤホンから音洩れさせながら聴いているのが常だが、今日は風情を楽しもうという趣旨か、していない。

「路傍の石のように美しいな、隆臥」

「落ち葉が？　蹲踞が？　どう云うことですか」

「いや。そんなのはどうでもよいことさ。

いやはや興ざめなことを申すなかれ。

直観だ。それを殺すな。この朽ち葉とてこの朽ち葉だけの存在でもあるまい。ともに全世界があるだろう。どこで区切って切り離そうと言うのか。強いて言えば今この瞬間が、全世界が美しいのさ。

呆れた奴だな。直観を訊かれても、さすがの小生も答えようがないぞ。直観は小生らに原的に、直截に与えられた観慨だからな。全ての判断の以前にあるものだ。

だから直観はただの直観だ。それ以上、何を言えばいい？　後は全部でたらめな憶測じゃないか。本来から言えば小生ら人間には原的、かつ直截に与えられた観慨以外、何もない。

全ての考概の元素は根拠も経緯もわからないまま、唐突に与えられたままで何ら証左もなされていない直観に過ぎない。その複合、積み重ねが考概で、合わせ重ね方は自然の摂理に任せられている。考概も直観的なものの一種でしかない。

少なくともそう直観されている。つまり斯く云う考概も謂わば単なる直観でしかない」

「また始まりましたか、尊師。秋の雰囲気が台なし、不粋、情緒なしですよ、真兮くん。どうか生活世界に戻ってくだされ。

そう云うウェルダンな理屈は早蕨（さわらび）が悦ぶんですよ」

「ああ、彼か。聞けば卒業して東京に勤めているそうじゃないか」

「ええ。早稲田に近い老舗の時計店です。専攻はイタリア美術史でしたからねえ。技師ではない。どうも足繁く通っているうちに憑かれたらしいですね。

前からアンティーク時計の収集をしていましたから」

「時計は感覚を刺激する。非情な正確さ、精緻な絡繰りで機能する。意匠も美術的だ。小生は特にメタリックな燦めきに惹かれる。ロレックスのデイトナやブライトリングのクロノマットとかね、余り詳しくないゆえ、月並みな固有名詞しか挙げられないが」

「私もよく知りませんよ。

ともかくも彼は彼の言うところのマテリアル主義者なんです。

早蕨は言辞や論考は脆弱だと考えています。智慧は力であるべきと云う考えから、物質こそが思想自体であると主張する。物質崇拝者です」

「なるほど。摩訶般若波羅蜜多心経の真呪も正確な翻訳は不可能と言われている。であれば言辞にも論考にも当て嵌まるまい。声音と云う物理的現象、小鳥の囀りやこの葉の擦れ合う音、海原の轟きや星辰の震えにも等しい。まあ、謂わば物質と云うわけだ。なるほどねえ。

ゆえに古来、力があると言われ続けてきたか」

「って云うことなんですかね、マテリアル主義って」

「小生もわからないが、わからなくてもよいんじゃないか。

言辞も論考もまっぴらと言うのなら、それで。無味乾燥」

で、実際、彌佐（いさ）早蕨はその朝十時に起き、サンタ・マリア・ノヴェッラの石鹸で顔を洗っていた。イルチェポのシェービング・ホルダーで剃刀を顎にあてる。ジャマイカ・カフェのオリジナル・ブレンドを淹れ、シチリア南部のチーズ、ラグザーノを頬張った。シルクのパジャマを脱いで、フィノッロのオーダー・シャツを着てマリネッラのタイを締め、アンティーク・カフスをつけた。ガッロの靴下を履き、クラシコ・イタリアを羽織り、アンドレア・ダミコの爬虫類革ベルトを通し、エトロのカシミール模様のチーフを胸ポケットに差す。ボルサリーノを被った。

ヘルノのトレンチ・コートを着る。レイン・コートと防寒用コートとの区別をしないのが習慣だからだ。ガットの靴職人が丹精込めた革靴に足を入れ、玄関を出た。

先ずは『ロレンツィ』で整髪し、昼食は二時に『ラ・フェンテ』、その後エステ『サトゥルニア』で爪を磨き、フェイス・マッサージを受け、行きつけの洋品店で着こなしを確認し、余暇は画廊『ベルニーニ』で雑談、腕時計を見る。

ここまでイタリア系で攻めながら代官山のフレンチ・レストラン、『ラズル』を択んだ理由は単に前回がイタリアンだったからとステファンヌ・マラルメを愛唱していたからとに過ぎない。近くのカフェでカプチーノを飲んで文庫の『神曲』を読んでいると、吉祥エステェーラが来た。彼女は母親がコロンビア人だ。成城大学一年生で英文学を勉強している。鼻尖が突くような、眼差しは燃え輝いているかのような黒髪の少女だった。

彼女が向かいに坐った。

「ダンテね」

「そう。

自らの恋愛体験を正気とはおもえぬほどの霊的な高みまで荘厳し、自らの正義を世界や歴史を裁くまでの絶対的公理として高く掲げ、驚嘆すべき空想力で滔々たる一大叙事詩を作り上げた男だ。愕くべきエネルギーだよ。

かつてトルストイの『戦争と平和』にも人間業とはおもえぬ偉業を感じたものだが、こっちも凄いね。凄いの一言に尽きるよ。力だ。まさに力は人の魂を崇高さで奪い、圧倒する。もし『イーリアス』にその力がなかったら古代ギリシア人はあの古典から道徳を学ぼうとはしなかったろうな。より深く解釈しようとは試みなかっただろう。真の力には叡智が秘められている。

『智慧は戦士を愛する』、僕はその言葉を連想するんだ」

エステェーラが寂しげに微笑んだ。彼女には余りないことだった。

「そうなの？　『Knowledge is power』と云うのもあるわ」

「フランシス・ベーコンだね。美しい言葉だ。まるで鍛えられたアラブの軍馬のようだよ。

さあ、ちょうどよい時間だ。行こうよ」

彼女のコートを取って着せ掛け、エスコートする。店で予約の名を告げ、軽めのカクテルを飲みながらウェイティング・バーでしばし待つ。

「元気ないね。そうでもないかい」

「そう？　気のせいよ」

二人はテーブルに着いた。ひとつひとつ料理を択ぶ。様々な注文をつける。芸術を鑑賞しながら五感で食事を悦ぶように、美しい異性を前にして料理に期待を膨らませるのは大きな快楽の瞬間だ。一秒一秒を味わい尽くすように愉しみたいところだ。

料理の注文が終わる頃、ソムリエが自然に寄って来る。ワイン・リストに並ぶシャトーの名を眺め廻しながらソムリエのアドバイスを聞くのも快感だ。クラッシック・カーのコンクールで磨き抜かれた名車を眺める気分だ。楽しみは余計に膨らむ。

食前酒にシェリー酒を傾けた。

「この前菜の牡蠣はね、軽く火を通してクリーム・ソースで和えたものなんだ。素晴らしい。僕の次の主菜はシャンポンさ。去勢して太らせた雄鶏でね、柔らかくて肉汁が多い。だが君の主菜の鶉のトリュフ詰めも素晴らしいよ。いや、説明はこのぐらいにしておこう。どんな説明も実際の美味には敵わない」

エステェーラはオマール海老のムース、キャビア添えを食しながら微笑むだけだった。

ワインはコルトン・シャルルマーニュ、シャトー・シュヴァル・ブラン、そしてシャンパンがクリュッグ・グランド・キュヴェ。食事は進むが、会話は芳しくない。

チーズを食べながら早蕨は再び訊ねるのである。

「やはりね。元気がないよ、エステェーラ。どうしたの」

「ごめんね。やはり隠せないわ。

先月、父が脳梗塞で倒れたのよ。左半身が麻痺しちゃって。それで母が介護しているけれども、とても疲れてしまったようなの。精神的にも打撃だったんだわ」

「どうして今まで言わなかったの」

「合う時間も少なかったわ。あなたは忙しくて、私も」

「しかし電話やメールが」

「心配されたくなかったの。父のそんなことに、触れられたくなかったのよ」

早蕨は意外に隔たりがあったんだなとおもい、寂しく感じたが、今は自分の心痛を訴えるタイミングではなかった。

「ごめんね、無神経なことを言って。わかったよ。僕もとても驚いて動揺している。しかしエステェーラ、世界には様々な不幸がある。ウガンダやイラクやコソボやチェチェンなどで、だ。信じがたいような不幸が起こっていて」

「そんなの関係ないでしょう。あなたはいつもそうだわ。私、帰る」

「なるほどねえ。

まあ、君の言ったことは客観的な事実の叙述と云う点に関しては間違ってはいない。だが適切であったかどうかは別の問題だ。そうじゃないかい？

余りに平均的な意見で、君と彼女との関係には何のリアリティもなく、彼女にはむしろ冷たい、非同情的と感じられても仕方ないさ。

君がいつも言うように、言辞や論考は実践的とばかりは言えないんだ」

「そりゃあ、わかりますよ、今はね。でももうそれ自体が修辞学的な意味しかない。問題はこれからどうするかです、隆臥先輩」

「人間関係ができていれば悩むような事件でもないとおもうがなあ。人の情は常に流動的で、捉えがたく、変遷する。まあ、ひとつだけ言えるのは真兮くんには相談するのは止めておいた方がよいよ。

それだけだな」

「そうですね。僕も尊師に電話するつもりはありませんでしたよ。じゃあ、今日はこれで。すみませんでした、遅い時間に」

「気にするな。いつでも電話してくれ。こっちは相も変らぬ太平楽だから。じゃあ」

第9章　バウツダ

現実、真実、事実、とは何か。我々は数千年にも渉って様々なかたちで検証しようとしてはいまいか。だがそれであることが検証されたものはなぜそれか。蓋然性を実証する実験の結果が究明の正しさを証することは自明であるようにも思われる。現実に有効であることが現に直観されるからである。だがそれが現実、真実、事実を明晰にすると云うことであろうか。主旨を慮ればもっと根源的に問うべきことがないか。明晰にすると云うことは何なのか、とも言えるからである。しかもそれは疑問符の一例でしかない。

いかなるものであっても我々は我々が原的に直観するものを是認せずして我々の思考の運行規則に準じた正統なる、明晰な論を捗ませることはかなわない。解釈も説明もなせない。零の状態から論理のみで積み上げられた明晰なる理解を構築することはできないと直観されているからである。

たとえば犬と云う概念がある。しかしそれは何か。我々は犬を了解してはいる。了解はしているが、省みてそれを観ずるに説明ができない。人が説明であると思っている説明の実情はまず語の言い換えであって必ず次の説明を要し、それ抜きに考えても属性に終始する概説であって本質などではけしてない。試みに犬と云う概念を髣髴して観るも、我々が見出すものはただ納得と云う心的現象あることのみで他に何も見出せない。既に解し了わったと言うが、我々は犬と云う概念がいまあるかたちを做すに至った経緯もわかっておらず、なぜ違うかたちで犬と云う概念を做せなかったか、このかたちがどのようにしてどのような了解を構築しているかもわからないと云う状態にあり、すなわち我々は了解しているとは言っても、明晰さなど欠片もなく、普通に運行規則に照らす試みのうちでも何ら了解を做していないことやら只管納得の心的現象のうちにあるのみと云うことが判明に直観されるのである。

かように思惟を捗ませて判断へと運行する規則があることは直観に晰らかで、たとえばそう云う経絡を意識に捉え、規則がどのように定まったどのようなものであるかを論究しようとしても直観のごとくであって経緯

もなく唐突、忽然たる自爾性を帯び、暴虐な FORCE である、と云う判断に陥り至らざるをえない論究の捗みもまたまさしくそれそのものである。

なお自爾とは根拠や原因や経緯等々に依らず、自ずから爾なることを謂い、よって思考の運行規則に暴虐であり、準じた解釈しかなしえない我々には経緯なく唐突、拠なく忽然たるものであり、人間性に異叛する只管力学的なるもの、無機質な FORCE として映ずる。原的直観などもこの例に当該するものである。

人間は諸概念や思考の運行規則に類する意識行為一般が本質に理叡と云うロゴスを持っているものと暗黙に期待しているが、実質は右のとおり所謂理叡性のない FORCE であり、只管力学的な無機質なるものであって、理叡が意識行為をそれにならしめるものとするならば理叡は非理叡性を特性とする自爾的 FORCE である、と云う判断へ逝くようにしか我々の思考運行規則は捗ませてくれないのである。ただし飽くまでも直観する限りにおいては、である。だが、畢竟、それでしか我々の存在はありえない、と観ぜられてはいまいか？

直観でしかないから根拠脆弱であると云う批判も規則の導くところでしかないと云う限界附のものである。それゆえやはり論として脆弱、と云う批判もまた規則上でのみ有効なものでしかない。かようであっても知るとは何か。それすらもわからずに我々は問い、何をしようとしているのか。

我々は我々の規則に従って我々が求めさせられているものを求める限り、陥らざるをえない絡繰りに組み込まれているかのように観ぜられなくもない。永劫たどり着けない装置として意識が企てられ、構築されているから当然のごとく陥るところに陥るかのように観ぜられもするのである。

いったいこの状況の現実、真実、事実はどこにあるのか。

もはや観ぜられるものは我々が観ずるその観に我々があると云う感覚のみである。観ずるとは何か。観ているか、観せられているか、受被か、企投か、それらの判別すら択べない。思考と云う運行が行われているようにも観ずるが、運ばれているか、運んでいるか、その区別すらも定かではない。観にあると云う茫漠とした観がいずれも知れずわくも、それがどう云うことか全く分明ではない。全てが知られないところで他人の顔をし、勝手に行われているかのような異隔覚、無為渺茫としか観ぜられない。我々は観のありのままの中途にたたずむのみでしかない。現実のままである。

（ここから後の2段と1行はメモとなっていた）

楽夏は由伽とともに鳧斗（ふと）神社に来ていた。哥舞妓の件。ガールズバンド。イタルへの憧憬。磐と語る真兮。和綴本。携帯と百万塔陀羅尼。隆臥へ連絡を。

普蕭に求められてギターを採していた〆裂の発見と叭羅蜜斗への連絡。叭羅蜜斗は普蕭へ。

普蕭はパンセを構想、大楽と連絡していた。大楽は春慶を呼ぶ。

隆臥は早蕨へ。早蕨帰省せんとするも春慶に会う。車とロック、哥舞妓から購入。

哥舞妓、迎えに行く。由伽が気になる。春慶が大楽に、普蕭は〆裂のところへ。じゃあ、大楽も、と。

楽夏と一所を見たよと真兮。楽夏が慌てて彝之家に来れば、由伽のメッセージを持って。

神社、真神之大御神、佐枳弥多摩倶斯美托磨彝啊礪杜御。荘厳法華経の世界、マテリアルな日常、カタログ。百万塔陀羅尼の発見。伝説のアーティスト。神憑り。古本屋とライブハウス、パンセのコンセプト。恍惚の宗教、磔刑の喜悦、崇高なるゴシック大聖堂。ダッヂバン・ラムチャージャー。

楽夏　由伽　哥舞妓　真兮　早蕨　隆臥　叭羅蜜斗　普蕭　〆裂　春慶　大楽　翔太

だがしかし我々はそれでしか存在でいられない。

（以下の段は第2章の唐突な冒険に繋がるのか？）

土砂降りの山中、能笹を分けて先頭を進むのは〆裂だ。彼は怖くないのだろうか。次を参謀役の普蕭と豪気な叭羅蜜斗とが行く。笹を分ける手間が少ないので彼ら以後は私も含め、雨合羽のみならずに傘も差している。二人の後を〆裂に次いで真神山に詳しい哥舞妓、知恵者の真兮、龍肯が並んで登る。その後ろから左右を春慶と早蕨とに挟まれる私は背に大楽と翔太とがいてくれるので、ちょうど傘でできた小さな家にいるような感じだ。時刻は夜の十一時。

（唐突に物語が再開する）

浮図とはホトケのことらしい。仏陀と云うのは知ると云う動詞buddh（ブドフ）の過去分詞形らしい。サンスクリット語ではブッダと言うが、中央アジアなどではブドだったりもするらしい。それでフト（浮図）なんて言い方もあるわけだ。

私は不覚にも長く鳧（ふと）斗神社の祭神はその名の連想から経津（ふつ）の神だと思い込んでいた。香取神宮などにお祀りされている武神に同じである、と。だが過日、県紙で左の記事を眼にしたとき、認識は大いに改められた。

『　通説を覆すか　一枚の瓦に〝逆卍〟

二月九日、県教委は真神郡真神村にある鳧斗神社の敷地で発掘調査中の柱跡から十数枚の瓦を発見し、その一部にいわゆる〝逆卍〟の紋が象られてあったところから、同遺構が廃寺の跡である可能性が高いと発表した。同神社は真神山の北面中腹にある小社で、神亀四年に開かれたとされている。また同山は頂上に少なくとも

古墳時代に遡る甕棺があることで知られており、真神郡一帯有数の聖域とされていた。（中略）

なお、今回の発見に関連する文献は一切認められていないが、上層部より出土した甑の断片によって四世紀末から五世紀末の可能性もあると見られ、立証されれば、仏教伝来の通説を覆す新発見となるものとして……』

そこで村立郷土資料館及び県埋蔵文化財センター図書室に赴き、関連文献を調べたのであった。仕事を辞めて以来、暇だったのである。

（再びメモとなる）

真分くんはその道の碩学であった。

現実と云うものを真の客観的事実、と云う意味で捉えようとすると我々は迷宮に陥る。我々にとって現実とは比較してより切実な事象のことである。

私は連綿である。

連綿たることが私の命なのである。

『私はこの土地に仏教に最も適った清爽の気があることを覚った。この地こそ仏祖が見出した真理が古来自然に存在する聖域だったのだ、と』

真実を欣求して炎のごとく駈られる者にとって現世一切は焦燥でしかない。むしろ全てはこの焦燥に駈るために存在なのである。かく推測する。だから私は解脱への路を択びたい。

（またまた物語が再開する）

この真理を、偉大なるイクシュヴァーク（甘蔗王）の後裔、太陽の子孫（日種族）、誇り高きサーキャ（釈迦）族の聖者、カピラ城（カピラヴァッツ）を統治したスッドーダナ（浄飯王）の長子、ゴータマ（最良の牛）の名を以て讃えられ、世俗に在りし日にはシッダッタと呼ばれ、仏陀となられた至聖至高の尊者に捧ぐ。

悟りとは現実を自爾性の非情と捉え、かくも虐殺されることを殉教と見て救いなきことを当然の理のごとく晰らめることである。それが客観的事実であるか否かは問題ではない。

釈尊は死の病に斃れ、阿難多に訴えた。

「喉が渇いた。水が飲みたい」

仏陀到来の噂を聞いて表敬のために壮麗な装いを凝らし、飾られた車に乗って勇厳な従者ら数多を率い、横臥する老人の前に立った王は驚き訊ねた。

「世尊よ、私は解脱者が不死であるものと聞いておりました」

釈尊は静かに諭した。

「すべては滅び行くものである。私は常にそのように説いた。どうして仏陀がそうでないことがあろうか」

「しかし世尊よ、しからば解脱者とは何でありましょうか」

釈尊は静かに諭した。

「ならば王よ、もし仏陀が仏陀となって無常を免れるものなら、彼には常態への執著が一切なかったと言い切れるだろうか。無常から遁れることは無常の超越と言えるのであろうか。

私は死を免れることを欲して清浄道に入ったのではない。もしそうなら、生存への執著を遠離したとは言えない。死を免れても、死を免れたいとする気持ちがあり続けるならば、生存への執著があり、解脱者とは言われない。

私独り死を免れてどうして私が仏陀であるなどと言えるだろうか。明確に記説しよう。死を免れることはない。それが法である。現実である。すなわち正義である。義しいから、そうあるのである。自然が導く場所は義しい。この叙説が真実に基づくかと問うか、王よ。真実と云う考概のふち取りがそのかたちを編み出された経緯すら知られぬと云うに、晰らかな解脱へと導く仏教（バウッダ）を猜疑することにいかなる意義があるか。

人が死を免れぬは法である。死は義しい。

よって王よ、悟れる者である仏陀がどうして変じようか。涸渇し、飲み水を欲する」

第10章　ふぁんたじあ

「で？

これがなんなのですか」

島の椰子の木を伐って組んだ小テーブルの上いっぱいに広げられた、古くて埃っぽい紙の端をつまみながら、彼が問う。

男は答えた。

「百十数年ほど前の手漉きの紙に取られたもので、なにしろ、公開はされていますが、触れることのなかなか

に許されておらない聖物が原本ですから、このように数十年、ときには数百年の期間に一、二度取られる拓本としてしか、写しが存在しないのです」

「いや、まあ、そうなんでしょうがね、僕が伺っているのはこれがなんの拓本ですかと云うことですよ」

「お教えしてもご存じないに相違ない」

「ふうん。

見せておきながらなにを言うのやら。知っているかどうか、聞いてみてからでなくては、僕には言えませんがね」

「ご覧になっていながらわからないようでは、原典の御名を聞いても既に」

「いやいや。図柄の部分はわからないでもない。

全体は円陣か、それとも大きな紋章か。

並列する文字を囲むように円周形の意匠があり、そこに蔓蔦を図案化したものか、龍形のようなものが繰り返し、繋ぎ綴られ、描かれている。それはわかる。

しかし文字は。こんな文字は見たことがない。だが、それだけのことだ。どう云う書物であるとか、偈頌であるとか、知らないとは限らない」

「サンスクリット文字と云うものです。梵字と言われるものです」

「ふん。で、なにが書かれているのですか」

「陀羅尼ですよ」

「陀羅尼？」

「真咒です」

「なんと云う咒ですか」

「摩訶般若波羅蜜多心経」

「知りませんね。なんて書いてあるんですか」

「そら、あそこに磐があるでしょう」

「え？　ああ、あの椰子の林の尖にある奴ですか。この辺じゃ象磐って呼んでいますよ」

「そうですか。白砂から突き出ている鯨みたいだと感じましたが」

「まあ、いろんな見方があるでしょうね」

「実に」

「で、それがなんですか」

「ですから、上をご覧なさい」

「はあ」

「なにがありますか」
「屋根ですよ」
「石葺の屋根ですか」
「椰子の葉に決まっているでしょう」
「あなたの素足に今感じているものはなんですか」
「別になにも。
だって流木を綱で結んだ床があるだけじゃないですか」
「ここはどこです」
「どこって、バル（酒場）ですよ」
「どこの」
「アルコブランコ浜じゃないですか」
「浜のどこにありますか」
「見たとおりでしょう。桟橋の尖っぽですよ」
「桟橋ですか。魚や蟹たちは流木としか思いませんよ」
「当然そうでしょう。
流木を立て、そこに流木を綱で結わいて繋ぎ並べだけですから」
「実用ではない」
「まあね。
村には小舟しかありませんから。
漁が終われればマストを抜いて帆を巻き、舟本体は引っ張って砂浜の奥の方、椰子の木陰にでも上げて置けば済みますからねえ。繋留する必要なんかない。
白い砂浜と椰子の樹とだだっ広いだけの空間に、白骨みたいに乾いた流木で作った粗末な桟橋が蒼い海と青い空とに向かってぽつんと伸びているのが絵になる、だれかがそう考え附いて据えてみたくなったんでしょうね」
「そう云うことです」
「はあ？」
「同じです」
「なにが」
「今あなたが叙べたことです。それと同じだと言ったんです」
「ああ、余りに話を逸らすから、自分がなにを訊いていたか忘れていた。

僕はなにが書いてあるのかと質問したんだ」

「ですからそれにお答えしました。この文字ら、同じく実在物です、と」

少し黙って考えてから、

「そうですか。

やはりね。

いや、そりゃ素敵ですよ。実在ね。

まあ、それはそうとも言えるんでしょうがね。でもね、そう云うんじゃなくって、内容がなにかってことを僕は伺っているつもりです」

「磐です。椰子の葉です。珊瑚礁です。摩訶般若波羅蜜多心経は実在する真理です。禽獣に訊いてご覧なさい」

「禽獣にねえ。

ははん。いや、素晴らしい。ふふん。素敵だ。

まあ、無理でしょうがね」

「それは訊き方が間違っているからです。

理叡や感情を逸脱すれば真実は共通します」

「なるほどね。それは、それは。

まあ、いいでしょう、もう。僕は哲学者でも宗教者でもないし、芸術的な感性にも縁がない。残念でもなんでもないが。

現実主義を標榜しているつもりですよ。では、ともあれ、それならばこの咒に、なにか功徳があるんですか」

「ありますよ」

「磐や椰子の屋根と同じなのに？　理不尽じゃないですか」

「理ですって？　いやはや、理なんて！　ならばお尋ねしますが、王様はなんで王様なんですか」

「世襲ですから。血筋でしょう」

「なぜその血筋に生まれたのですか」

「その血筋に生まれたから生まれたんです。運命だったんでしょうよ」

「同じです。そうだからそうなったんです。差別化がなくとも、これにしかない功徳がある。そう云うことがあり得る。運命です」

「いや、もうよいです。聞きたくないし、無意味だ。とてもかくても疲れました。

で、これが僕になんの関係があると言うのですか」

「この原本がヒムロの聖ヴィード大聖堂にあります。軟玉のような薄濁りの縞目が入った聖サントゥワール山産の白大理石を使った円盤に聖文字を以て彫られ、螺鈿の象嵌でそれら文字の輪郭一つ一つが太く盛んに縁取

られ、金泥のようなまばゆい発色を做す黄金とダイヤモンドとが迦楼羅の炎の揺らぎを図案化した文様を構成するように巧みに交互に嵌め込まれています。これが祭壇の前にある拝覧台に収められ、信者が分厚い板ガラス越しに手をあて、祈りを唱えられるようになっているのです。

これら文字はご覧のとおり、円形の意匠によって囲まれ、荘厳されています。円陣は摩訶般若波羅蜜多心経を守る聖なる円楯です。真咒がその名のとおり真実であることの正統性をその荘厳に晰らかにする光燦です。それが虚しからず、実現力のあることを証する紋なのです。

この円を做している意匠は、全て銀やエメラルド、翡翠、ルビー、真珠、サファイア、碧玉、黄鉄鉱の細かな結晶が深青の地に黄白色の光沢を示すラピスラズリなどで象嵌され、眺めるだけで真咒から賜る応分の功徳があると古来伝承されています。

外輪は炎を表し、それがルビーです。そればかりではありません。血赤珊瑚やアルマンディン・ガーネット、パパラチア、インカ・ローズも細やかに使われています。極々わずかですが、ブラック・オパールとボルダー・オパールとが使われているのを見過ごしてはなりません。

その炎の輪を上下に二分割するかのように、聖句の円周が施されています。それら言葉はインペリアル・トパーズの黄玉と翡翠とサファイアとエメラルドとで嵌め細工された繊い細線で精緻緊密に構成されています。

その内側は九匹の龍神で構成される円陣ですよ。

黄鉄鉱の散るラピスラズリ製浮彫の龍文が右手右脚を挙げ、首を後ろにねじり、孔雀石の鬚髯が天を衝いています。鬣と瞳孔とは青孔雀石です。その両眼の白目は真珠、牙と爪とは琥珀です。

さらにその内側ではトルコ碧玉と銀と血赤珊瑚とがアラベスクを燦めかせています。

これら全体が聖なる紋を做し、光の燦然を表現し、なおかつ真咒を荘厳し、護教しているのです。

あなたにもそこへ行ってもらいたい。手をあて、贖罪の咒を唱えていただきたい」

「へえ?」

「贖罪の咒です。お耳は確かか」

「それをヒムロまで行ってですか。僕の聞き間違いでなければそれは北大陸にありますがね」

「衆人の知るところです」

「簡単に言われるが、ここはピエドゥラ島ですよ。アマリリョ諸島です、メディテラノ海のど真ん中なのはご存知ですよね」

「むろんです」

「しかも北大陸に上陸してからまだ数千㎞の都です。本気でそこへ行けと仰るか。たとえでなくに? もしそうなら、なんて莫迦らしい。

それにそもそも、どうしてそんなことをしなくてはならないか」

「運命ですな」

渚の波は静かだった。

寄せては返す。かすかな椰子の葉のすれることが蟹の足音をさえぎる。

午睡の時刻だ。

剃髪が不精に伸び男は短い髯を蓄えた初老の、鞣革の皮膚を持った修道服の人物で、歯はそろっているが、ヤニで汚れている。

「ねえ。

あなたは考えているのかもしれない、確かに僕は未だ十七歳の少年に過ぎません。だが、働き始めてからは既に四年以上が経過しています。叔父のところに勤めていますが、それなりに重要な仕事を任されています。その仕事を抛って或る日、突然旅立てるぐらいの身分なら、ああ、それならどんなにか幸せでしょうか。請求書に対する支払いをしなくちゃならない。僕の信用もなくなるし、取引先が倒産しちまったらどうしますか。その家族が路頭に迷い、僕を怨みますよ。叔父から命じられた調査も終わっていない、というよりか、気が進まなくて手を附けていないし、大急ぎで作るべき契約書もあるし。

それに家族だ。父は働いていない。僕にはまだまだ妻子はないが、両親を背負っていれば十分でしょう」

「大した問題ではありません。

一切は空ですから。

むろん実存的にはそうではない。だが実在的には紛れもなく、科学的にそうです」

「ほう。

大した問題ではないとね。家族愛が。では、人間なんてなんの意味もないのです」

「そう言ったつもりですが」

「では、僕の眼の前にいるのは、きっとトカゲに違いない。少なくとも爬虫類だ」

「無慈悲な。

トカゲはどうなってもよいと主張されるか」

「異なことを。家族がどうなってもよいと言われる、あなたが」

「どうなってもよいとは言っていませんよ。空だから問題にされている本質性は実在ではない、と言ったのです」

「いいです。

そう云うことにしておいてください。ご託より伝票一枚の方が現実です。

それとも真咒が書類を書いてくれますか。今はそれが切迫しているんです」

「放って置きなさい。津波が襲えば全ては無に帰します。津波は自然です。あなたも自然の中の現象に過ぎません」

「僕の怠慢に因る債権者の倒産も自然現象ですか。そうとも言えるんでしょうがね、詭弁です。世間融通じゃない。

人間の営為は皆虚しいのか」

「いいえ。

努力が必要です。ただし、現実的な努力がね」

「皆空しかったんじゃないんですか」

「だが、全てを捨てることはできない。息をしないことはできない。親や子を見殺しにはできない。限界がある。人間は限界の中で生きる。その中でしか生きられない。

だから我ら聖教徒は本来、柔和な真理を説く。暴虐を言うつもりはない。智慧の女神は暴虐者を愛するとも言いますがね。

まあ、それはよしとして。

ここにアニルマニ製の純金硬貨が十二枚あります。この島でのくらしに充てるだけならば二十年くらいは不自由ないはずです。ご家族に渡しなさい。

あなたの旅費は海鳥島で待つ男が用意しています。

成功報酬は金貨百枚です」

イタルは考えた。

こんな得体の知れない話を応諾する者がいるか。

穏やかな海。相手も顎を上げたまま、平然と見据え返している。

イタルが口を開いた。まぶた半ばにまなざし遠く語る。

「これは非常に重要な案件だと云うことですね。そう推測するのが当然でしょう。むろん危険が伴うんでしょうね。けれども両親には説明して置いてはいけないんでしょうね。

だが、せめて僕にはなんのためにかの説明が欲しい。

それから、やはり訊きたいですよ。なぜ僕なのかを。少なくとも知る範囲で、僕は平凡な田舎者でしかない。

こんな廻り合わせが訪れるはずがない」

「第一の質問にはユリアスが答えるだろう。

それから次の質問は、また同じことを問うているよ。

もう一度言おう、ではなぜ王は王家に生まれたか。

イタルよ、人間は限界の中で努力するしかない。それとも蒼穹を飛べるかね？
それが現実だ」
「僕は今まであなたほど説得の下手な人を見たことがない」

逸脱しよう。
聖ルカ劇場は海鳥島の石灰岩の斜面上の街にある。にぎやかな人々の社交場だ。喜劇の上演があった。円形劇場の方は神事に使用される。別に良いではないか。理叡感情を逸脱すれば磐とも真理を共有する。結果的には自由闊達に見えるし、かろらかでもある。又、逸脱は義理人情とも矛盾しない。合致もしないが。これを逸脱と云うのである。